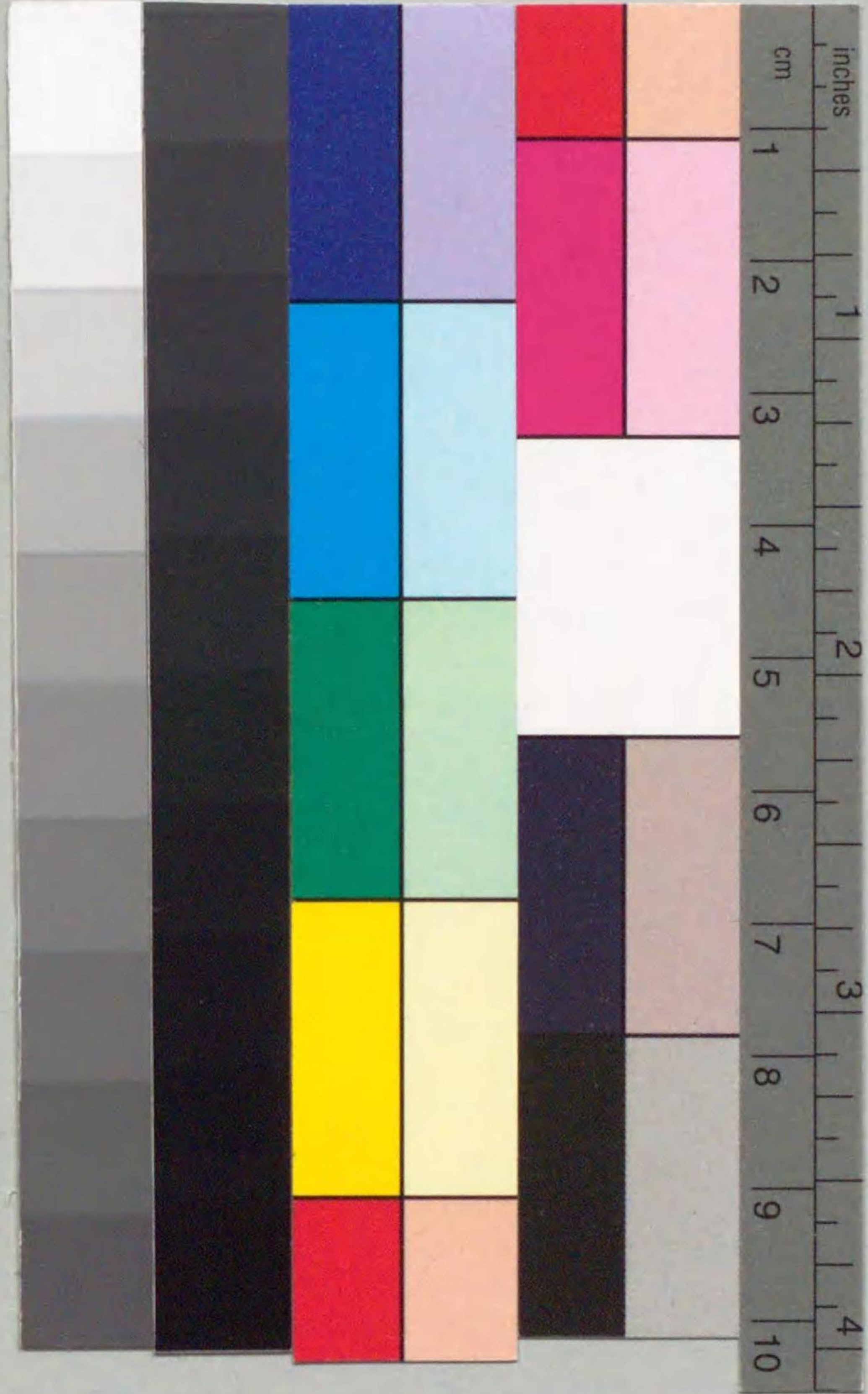
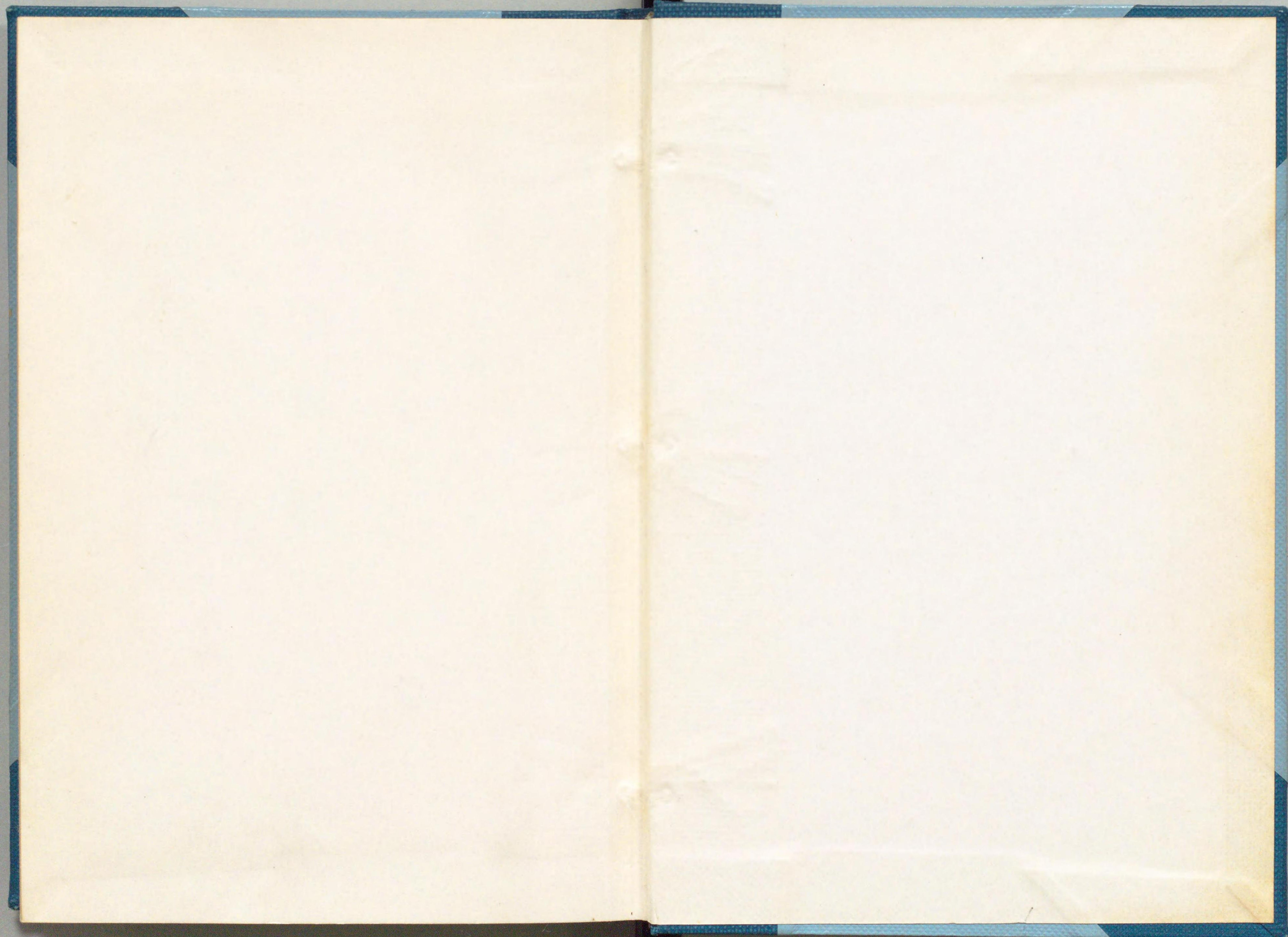


914.6
W99g



00278764





和辻哲郎著

偶像再興

岩波書店刊行

914.6
W999
J



278764

版を新にするに當りて

この書の紙型が追々使へなくなつて來たので、版を新たに組みなほすことになつた。この幼稚な、拙ない感想文の集が、それほど生き残つて行く價值を持つてゐようとは、著者自身の全く思ひがけなかつたところである。一時著者は慚愧の情なしにこれらの感想文を見ることが出来なかつた。今でもそれらが何らか優れたものを持つてゐるとは思はない。併し二十年の歲月は著者の心に幾分のゆとりを生せしめた。如何に拙なくとも、とにかくそれらは著者の生涯の一時期を表現するものである。それらが何人かに何らかの意味でお役に立つならば、強ひて抹殺するにも及ぶまい。かく考へて敢て新版を刊行することにしたのである。

この書に収録した感想文は、大正五年より七年へかけて、著者の二十代の末期に

版を新にするに當りて

版を新にするに當りて

二

書いたものである。その頃までの四五年の間はニーチェやキェルケゴールに没頭してゐたのであるが、その影響に加へて時代の氣分や著者の年頃の關係から、自己の主觀的な體驗を無暗に重大視し、それが恰も人生の中樞問題であるかの如くに振舞つてゐる。がさういふ自己中心的な關心の中にも、對象に即する思惟への傾向は幽かに現はれてゐるのである。「體驗と思索」から「思索と藝術」を通じて「藝術と文化」へ推移して行く過程が、丁度それを示してゐる。結末に現はれる「偶像崇拜の心理」は直ちに『古寺巡禮』に結びつくのである。だから著者自身としては、ニーチェやキェルケゴールへの關心から佛教美術や日本文化への關心に移り行く時期の記念を、この書に於て見出すことが出来るのである。それはまことに淺薄であつたかも知れぬ。が當時の著者としては精一杯のところであつた。

昭和十二年六月

著者

目次

序言……………三

體驗と思索

- 一 轉向……………二一
- 二 生きること作ること……………四七
- 三 ベエトオフェンの面……………六九
- 四 放蕩息子の歸宅……………七六
- 五 情欲と淨化の要求と……………八八
- 六 幼稚と云ふこと……………九〇

目次

一

七 或思想家の手紙 九六

八 停車場で感じたこと 一一六

九 夏目先生の追憶 一三五

一〇 人間の心理には 一六一

一一 懐疑と信仰 一六六

一二 世間の評判 一九六

一三 總ての芽を培へ 二〇六

一四 衆 愚 二一九

一五 公衆の喝采 二二六

一六 嘲笑と自欺 二二九

一七 杞 憂 二三三

一八 自 由 二三七

一九 非難を受くる心持 二三八

二〇 心と言葉 二五五

二一 樹の根 二六六

思索と藝術

一 リップスとニイチェ 二七七

二 リップスの個人主義 二八六

三 リップスの警告 二九二

四 「自然」を深めよ 二九九

五 藝術批評 三一六

六 競 争 三二〇

七 告白と廣告 三二四

八 三つの視點 三三三

九 創作の心理に就て 三五三

一〇 聖者と藝術家 三六三

〇一 苦言 三七八

藝術と文化

一 文化 三九三

二 世界の變革と藝術 四〇〇

三 『戦争目的』の評判 四一三

四 デモステネスの没落 四三一

五 日本は何を誇るか 四五四

六 偶像崇拜の心理 四六五

序言

序 言

偶像破壊が生活の進展に缺くべからざるものであることは今更繰り返す迄もない。生命の流動はたゞこの道によつてのみ保持せらる。我等が無意識の内に不斷に築きつゝある偶像は、注意深い努力によつて、また不斷に破壊せられねばならぬ。

しかし偶像は何の意味もなく造られるのではない。それは生命の流動に統一ある力強さを興へるべく、また生命の發育を健全な豊満と美とに導くべく、生活にとつて缺くべからざる任務を有する。これなくしては人は意識の混沌と欲求の分裂との間に萎縮し了らなくてはならぬ。人が何らか積極的の生を営み得るためには「虚無」さへも偶像であり得る。

偶像が破壊せられなくてはならないのは、それが象徴的の效用を失つて硬化する故である。硬化すればそれはもう生命のない石に過ぎぬ。或は固定觀念に過ぎぬ。けれどもこの硬化は、偶像そのものに於て起る現象ではなく、偶像を持つ者の心に起る現象である。彼らにとつて偶像は破壊せられなくてはならぬ。しかし偶像そのものは依然としてその象徴的生命を失はない。彼らにとつて有害なるものも、その眞の效用を解する他のものにとつては有益で有り得る。偶像再興が生活にとつて意義あるはそのためである。

二

文字通りの「偶像」に就て考へて見る。

使徒パウロは偶像を排するに火の如き熱心を以てした。彼の見た偶像は眞實の生の障礙たる迷信の對象に過ぎなかつた。彼が名もなき一人のさすらひ人として雅典の町を歩く。彼の目にふれるのは偶像の光榮に浴し偶像の力に充たされたと迷信す

る愚昧な民衆の歡酔である。彼らは鐃鉦や手銅鼓や女夫笛の騒々しい響に合せて、淫らな亂暴な踊を踊つてゐる。さうしてその肉感的な陶酔を神への奉仕であると信じて居る。更に甚だしいのは神前に捧げる閩人の踊である。閩人達は踊りが高潮に達した時に小刀を以て腕や腿を傷つける。さうして血みどろになつて猛烈に踊り續ける。それを見まもる者はその血の歡びを神の恩寵として感じて居る。その彼らはまた處女の神聖を神に捧げると稱して神殿を婚姻の床に代用する。性欲の神祕を神に歸するが故に、また神殿は娼婦の家ともなる。パウロはそれを自分の眼で見た。さうして「いたく心を痛め」た。桂の愛らしい緑や微風にそよぐプラタアネの若葉に取巻かれた肌の美しい女神の像も彼には敵意の他の何の情緒をも起させなかつた。臺石の廻りに咲き亂れてゐる董や薔薇、その上にキラ／＼と飛び廻つてゐる蜜蜂、——これらの小さい自然の内にも、人間の手で造つた偶像よりは遙かに貴い生が充ち互つてゐる。彼は興奮してアゴラへ行つて人々に論じかけた。エピクリアンの哲

學者が彼の相手になる。偶像の迷信を彼が攻撃すると、哲學者も迷信の弊を認めて同意する。彼はそれに力を得てイエスの復活を説き立てる。哲學者は急に熱心になつて靈魂不滅の信仰が迷妄に過ぎないこと、この迷妄を打破しなければ人間の幸福は得られないことを説いて彼を反駁する。彼は全能の造物主を恐れないのかときく。哲學者はこの世界が元子の離合集散に過ぎないこと、現世の享樂の前には何の恐るべきものもないことなどを答へる。パウロは益々熱して永生の存在を立證する彼自身の體驗に就て語り始める。物見高い雅典人は——「唯新しきことを告げ或は聞くことにのみその日を送れる」雅典人は、また一つの新しい神が輸入せられさうになつたことに非常な興味を起して、アレオ山の裁判場へ彼を引張つて行く。そこには或事件の傍聽のために多數の市民が集まつてゐる。事件の判決が済むと、餘興をでもやらせるやうな調子で彼が呼び出される。君は珍しい話を知つてゐるさうだが、一つその新しい宗教といふのを説明して貰ひたい。

パウロは山頂の石壇に上り、アクロポリスの諸殿堂と相對して立つた。——雅典の市民諸君。諸君の市は神々の像と殿堂とに覆はれてゐる。諸君はその神々を祭るために眠りをも忘れて熱中する。けれども諸君はこの神々に眞に満足してゐるか。予は散歩の途上、諸君の禮拜する所を見て歩いた時に、「知らざる神に」と刻りつけた一つの祭壇を見出して非常に驚いたことがあつた。諸君の中には確かに或未知の神への憧憬が動いてゐるのである。予の神はこの、諸君が知らずして禮拜するところの神である。諸君はあの祭壇に、人間の手で作つた神を据ゑなかつた。それはまことに正しい。萬物の造主である活ける神は、人の工と巧とを以て石から造られる神とは違ふ。それは手で造つた殿堂に住まない。また人の手で犠牲を捧げられることを要せない。それは生命の根據である。人間の造り主である。何で人間の手を借りる必要があるだらう。諸君はこの活ける神を信じないか。そのひとり子をこの世に送り、彼を死より甦へらせて明かな證を我々に示したこの大いなる神を信じない

か。云々。

——このパウロの熱心は、とにかく千數百年の後まで權威を持ち續けた。たとへ偶像禮拜の傾向が聖母崇拜や使徒崇拜などの形で生き残つて行つたとしても、美しい希臘諸神の像は遂に中世の闇の内に隠れてしまつた。八世紀の偶像破壊運動は、基督教の聖者像をさへも寛容しようとしなものであつた。

やがて新しい時代が來た。地を掘る反基督の徒は穴の底から歡喜にふるふる聲で「偶像、偶像」と呼んだ。古代の赤煉瓦の壁の間に女神の白い裸身は死骸の如く横はつてゐる。さうして千年の闇のうちに初めて光を、炬火の光を、ほのあかく全身に受ける。ヴィナスだ、プラキシテレスのヴィナスだ、と人々は有頂天になつて叫ぶ。やがてヴィナスは徐々に、地の底から美しい體を現はして來る。

或者は恐怖のために逃げ去らうとする衝動を感じた。しかし奇妙な歡びが彼の全身を捕へて動かさせなかつた。それが地獄の劫火に焚かるべき罪であらうとも、彼

はその艶美な肌の魅力を斥けることが出來ない。そこに新しい深い世界が展開せられてゐる。魂を惡魔に賣るともこの世界に住むことは望ましい。

それが新時代の大勢であつた。地下の偶像は皆蘇つて、再び太陽の下に打ち立てられた。狂熱的な僧侶の反動もたゞ大勢に一つの色彩を加へたに過ぎなかつた。しかし再興せられた偶像はもはや禮拜せらるべき神ではない。何人もその前に畜獸を屠つて供へようとはしなかつた。何人もその手に自己の運命を委ねようとはしなかつた。人々に身震ひさせたのはそれが異端の神であつた故ではなくして、それが美しかつたからである。偶像は禮拜せらるべき神であつた限りに於て、當然パウロの排斥を受くべきであつた。しかし美の故に禮拜せらるべき藝術品としては、確かにパウロから不當な取扱ひを受けた。今やその不當な取扱ひは償はれ、たゞ藝術品としての威嚴を以て人々の上に臨んだのである。

かくの如き偶像の再興はまた千年に互る教權の壓迫への反抗をも意味した。偶像

再興者の眼より見れば、教權こそは破壊せらるべき偶像に過ぎないのであつた。遂に古い偶像の再興は新しい偶像の破壊の蔭に隠れた。古い偶像と共に力強く再興した唯物論も、新時代の自然科學的運動の動機となりながら、その花々しい新眼界展開の蔭に隠されてしまつた。

文藝復興の運動はいろ／＼の意味で偶像破壊の運動だつたに相違ない。しかし根本に於てはそれは字義通りに古代の復興である。古代の内の不滅なるものを復興する事によつて、新しい運動はその熱と力とを得たのである。

偶像は再興せられた。パウロの神は或意味で死なねばならなかつた。

三

基督教の「神」もまた一種の偶像である。パウロは「人間の手」によつて造られた偶像を排斥した。近代の偶像破壊者は「人間の頭」によつて造られた神を排斥する。しかしパウロが偶像を滅盡し得なかつたやうに、近代の偶像破壊者も亦神を滅盡す

ることは出来ない。「神は死んだ」といふ喧しい宣言のあとで、神を求むる心は忍びやかに人々の胸に育つて行く。

基督の復活を認容することの出来なかつた物質論は今や人類の常識である。神が七日にして世界を創造したといふ物語の如きは「物語」以上に何の權威をも持たない。處女懐胎は狂信者の幻想に過ぎぬ。神の子の信仰は象徴的の意味に於てさへも形而上學的空想以上の何物でもない。世界は確かに古昔の元子論者が見た如く或基本要素の離合集集によつて生じたのである。靈魂は肉體の作用であり肉體と共に滅びる。死とは活動の休止であり組織の解體であるが故に死後の生があるわけではない。この事實から眼をそむけて神と死後の生とを借構するのは、現實をありのままに受容するに堪へない卑怯者の所作に過ぎぬ。——かくの如き常識にとつては「神が死んだ」といふ宣告の如きはもはや何の刺戟にもならない。神はもと／＼存在しなかつたのである。そこで人間は現世の欲望の満足を唯一の目標として生活する。彼を

束縛するものはたゞこの満足のための功利的節度の他に何物もない。

しかし人はこの物質的な世界に何の不足もなく安住することが出来るか。愛の歡喜にある時彼はその幸福の永遠性を望まないか。官能の悦樂のあとで彼はその果敢なさに苦しまないでゐられるか。痛苦を堪へ忍ぶ時彼はこの生が生理的偶然に過ぎないといふ考へを悦ぶことが出来るか。——この間に「否」と答へる人の多いことは解つてゐる。しかし「然り」と答へる人も亦多數であることは否み難い。そこで問を新しくする。人はこの常識以上に深い神祕を自然に求めないでゐられるか。愛の神祕、官能の祕密、生活の底知れぬ深み、それを掴まうとしないでゐられるか。恐らく何人も曾て一度はこれらの要求をその胸に抱いたであらう。或人々は遂にこの要求に全心を占領させるのである。科學の道に入れば彼は自然と人生とに現はれた微妙な法則に驚異して或知られざる力に衝き當らずにはゐられない。哲學者としては彼は生命の創造力の無限に驚いて人智の彼方に廣い世界を認めることになる。

——偶像は再び求められるのである。

神は再び蘇へらなくてはならぬ。それが基督再臨によつて證せられるか否かは我等の知るところでない。我等は神を知らない。しかし我等の生が神と交通し得るものであることは疑ふわけに行かぬ。神は教會を神として、教理の神として死んで行つた。しかし我等の無限の要求は、この神の死によつて煩はされはしない。我等は神の名を失つた、しかし我等は彼に附すべき新しい名を求めずにはゐられない。彼は「意志」と呼ばれるべきであるか。「絶對者」と云はれるべきであるか。或はまた「電子」と呼ばれるべきであるか。恐らくそれらの名は新しいパウロによつて鬼神として斥けらるべきものだらう。我等は「知らざる神に」祭壇を築いて、その神を説きあかすべきパウロの出現を待つ。さうして近代精神の造り出したあらゆる偶像の破壊を期待する。

右の如き偶像の破壊と再興とは、十九世紀末の大いなる個人の生活によつて例示

せられた。トルストイは前半生に於て自然の勝利を、自然的欲望の勝利を歌つた人である。併し後半生に於ては忠實な神の僕であつた。ストリンドベルヒは自然主義の精神を最も明かに體現した人である。しかし晩年には神と神の正義との熱心な信者であつた。デカダンの詩人が最後に神に歸らなければならなかつたことも人の知る所である。彼等は偶像再興の先驅者であつたのか。もし既に彼らが先驅者であつたとすれば、二十世紀初頭の兵亂と災厄との前で、人々はこの新しい道を凝視しなければならぬ。

四

破壊せらるべき偶像がまた再興せらるべき権利を持つといふ事實は、偶像破壊の瞬間に於ては殆んど顧みられない。破壊者はたゞ對象の堅い殻にのみ目をつけて、その殻に包まれた漿液のうまさ忘れてゐる。しかし生活を全的に開展せしめようとするものは、この種の褊狭に安んじてはならない。これ偶像破壊者の危機に對す

る最第一の警告である。

予は自ら知れる限りに於て生れながらの叛逆者であつた。小學の兒童としては楠正成を非難する心を持ち、中學の少年としては教育者の僭越と無精神とを呪つた。教育者の權威に煩はされなくなつた時代には儕輩の愛校心を嘲り學問研究の熱心を輕蔑した。さうして道徳と名のつくものを蔑視することに異常な興味を覺えた。宗教は予を制壓する權威でなかつたが故に好んで近づいたが、しかし何等かの權威を感じなければならぬ境地までは決してはいつて行かなかつた。寧ろそれを他の權威に對する叛逆の道具に使つたに過ぎなかつた。遂には生活そのものの權威に對してまでも叛逆の態度をとつた。深い愛を曾て體驗したこともないくせに愛を冷笑すること喜び、教權の壓力を曾て感じたこともないくせに神の死を喝采した。それは當時の予にとつて人間生活の最高の階段であつた。さうしてかくの如き氣分と思想とが漸次近代偶像破壊者の模倣に墮して行つたことには、遂に思ひ及ぶところが

なかつた。

予は當時を追想して烈しい羞恥を覚える。しかし必ずしも悔いはしない。淺薄ではあつても、とにかく予としては必然の道であつた。さうしてこの齒の浮くやうな偶像破壊が、結局、その誤謬を以て予を導いたのであつた。——予は病理的に昂進した欲望を以て破壊に従事した。行き過ぎた破壊は予を虚無の淵にまで連れて行つた。偶像破壊者の持つ昂揚した気分は、漸次予の心から消え去つた。予は或不正のあることを豫感した。反省が予の心に忍び込んだ。そこで打碎いた殻のなかに味な漿液のあることを悟る機會が予の前に現はれた。予はそれを掴むと共に豊富な人性の内に蘇へつた。——

そこに危機があつた。さうして突破があつた。この體驗から予の警告は生れたのである。

五

予は道義を説く。愛を説く。或人はそれを陳腐と呼ぶだらう。しかし予は陳腐なるものの内に新しい生命を見出した喜びを語るのである。陳腐なる殻のうちに秘められたる漿液のうまさを傳へようとするのである。陳腐なるものは生命を持たないとする固定觀念に捉はれたものは、先づその鈍麻した感覺をやり起して自らの殻を悟るがいゝ。さうしてその殻を破るために鐵槌を振ふがいゝ。その時に初めて偶像再興に對する新しい感覺が目ざめて來るだらう。

しかし予はたゞ「古きものの復活」を目ざしてゐるのではない。古きものも蘇へらされた時には古い殻をぬいで新しい生命に輝いてゐる。そこにはもはや時間の制約はない。それは永遠に若く永遠に新しい。予が目ざすのはかくの如き永遠に現在なる生命の顯揚である。予はあらゆる偶像の胸を通ずる一つの大いなる道を豫感する。さうして過去未來に互る全人類の努力が畢竟この道に向つて集まつてゐることを感ずる。永遠に現在なる生命はこの道の上にあつて勇躍するのである。予はその

偶像再興

光景を描き得んことを願ふ。(大正七年十月 休戦提議の號外を傍に置きて)

一八

體驗と思索



一 轉 向

過去の生活が突然新しい意義を帯びて力強く現在の生活を動かし初めることがある。その時には生のリズムや轉向が著しく過去の生活に刺戟され導かれてゐる。さうして總ての過去が「過ぎ去つて」はゐないことを思はせる。機縁の成熟は「過去」が現在を妊娠し、「過去」が現在の内に成長することに外ならなかつた。今にして私は「過去を改造する意欲」の意味が漸く解りかけたやうに思ふ。

「過去」の重荷に押し潰されるやうな人間は、畢竟滅ぶべき運命を擔つてゐるのであつた。忘却の甘味に救はれるやうな人間は、「生きた死骸」になる筈の頽廢者に過ぎなかつた。潰滅よりも更に烈しい苦痛を忍び、忘却が到底企て及ばざる突破の

歡喜を追ひ求むる者こそ、眞に生き眞に成長する者と呼ばれるべきであつた。心が永遠の現在であり、意識の流れに永遠が刻みつけられてゐることを、たゞこの種の人のみがその生活によつて證明するだらう。

二

曾て親しくIやJやKなどに友情を注いだと云ふ記憶が私を苦しめる。彼等を「愛した」故に悔むのではない。「彼等の内に」自分を見出したことが堪らなく厭なのである。しかし私は自分の内に彼等と共鳴するものあつたことを——今猶あることを拒むことが出来ない。それ故に猶更その記憶が私を苦しめる。曾て私はあの傾向に全然打ち敗けてゐたに相違なかつた。

けれどもまた彼等から斷然冷かに遠のいた記憶が同じやうに私を苦しめる。(勿論その苦しみはこの轉向の二三年後に初まつた。さうして恐らく新しい轉向を準備して呉れるのだらう。私はそれを望む。)——とにかく私は自分の愛があまりに狭く、

あまりに主我的ではなかつたかを疑ひ始めた。私は彼等の「傾向」を憎んでも人間を憎むべきではなかつた。彼等の傾向を捨て、も人間を捨てるべきではなかつた。私は道を求めつゝ、道に迷つたやうに思ふ。

私は徹底を欲して斷然身を處した。さうして今はその徹底のなかゝら不徹底の生れ出たのを見まもつてゐる。私は二つの苦しみ of どれからも脱れることが出来ない。

三

何故に私は彼等を愛したか。

第一の理由は直接的である。私は彼等が好きであつた。彼等の顔を見、彼等と語ることが限りなく嬉しかつた。さうして私は彼等の内に勇ましい生活の戰士を見、生の意義を追ひ求める青年の焦燥を共にし得ると思つた。彼等の雰圍氣が青春に充ち、極度に自由であることを感じた。彼等の粗暴な無道德な行爲も、因襲の壓迫

を恐れない眞實の生の冒險心——大膽に生の渦卷に飛び込み、死を賭して生の核實に迫つて行く男らしい勇氣の發現として私の眼に映つた。かくて私は彼等の人格と行爲との總てに愛著を持ち續けた。

私は私の心を常に彼等の心に觸れ合はせようと欲した。しかし時の經つと共に、私は彼等がシンミリした愛情を求めてゐないのに氣付いた。彼等が尙ぶのは醉歡であつた、狂氣であつた、機智であつた、露骨であつた。總て陽氣と名の付かないものは、彼等の心を喜ばせるに足りなかつた。彼等は胸に沁み入る靜かな愛の代りに、感覺を揺り動かす騒々しい情調を欲した。かうして私はたゞひとり取り残された。私の愛は心の奥に秘められて、遂に出ることが出来なかつた。

この隙に第二の理由が匂ひ込んだ。私の内の Aesthet はそこに極めて好都合な成長の地盤を見出したのである。私の Aesthet は Sollen を肩から外して、地に投げつけて、朗かに哄笑した。私は手先が自由になつたことを感じた。一夜の内に世界

は形を變へた。新しい曙光は擅ほしいまな美と享樂とに充ちた世界を照らし初めた。かくて私は彼等の生活に Aesthet らしい共鳴を感じ得るやうになつた。

そこで私は彼等を彼等の世界の内で愛した。それは共犯者の愛著に過ぎなかつたがしかし私はそれを秘められた人間的な愛の代償として快く迎へた。その世界では彼等は皆私の先達であつた。彼等は私の眼に、世界と人間とが盡くることなき享樂の對象であることの、具體的な證左であつた。その頃の私には Sollen の重荷に苦しむ人が笑ふべく怯懦に見えた。享樂に飽滿しない人が恐ろしく貧弱に見えた。I や J や K が眞に愛著に價する人間に見えたのも不思議ではない。

四

何故に私は彼等を憎んだか。

それは私が彼等の如き Aesthet ではなかつたからである。私が Sollen を地に投げたと思つたのは錯覺に過ぎなかつた。Sollen は私の内にあつた。Sollen を投げ捨

てるためには、私は私自身を投げ捨てなければならぬのであつた。私は自分の内に Aesthet のあるのを拒むことは出来ないけれども、私自身は Aesthet になつた。かくて私は一年後に、Aesthet の如く振舞つた故を以て烈しく自己を苛責する人となつた。

私は彼等を愛した自分から腐敗の臭氣を嗅ぐやうに思つた。そこには生の眞面目は枯れかゝり、核心に迫る情熱は冷えかゝつてゐた。生の冒險の如く見えたのは、遊蕩者の氣儘な無責任な移り氣に過ぎなかつた。生の意義への焦燥と見えたのは、虚名と喝采とへの焦燥に過ぎなかつた。勇ましい戦士と見えたのは、強剛な意志を缺く所に生ずる駄々兒らしい我儘の故に過ぎなかつた。私はその時までその臭氣に氣附かないでゐた自分を呪つた。道徳的には潔癖であるさへ思ひ習はしてゐた自分が、汚穢に充ちた泥溝の内に晏如としてあつた、と云ふ事實は、自分の人格に對する信頼を根本から揺り動かした。

腐敗はそれのみに留まらなかつた。私は何時の間にか愛の心を軽んじ侮るやうになつてゐたのである。私は人間を見ないで享樂の對象を見た。心の濃淡を感覺の上に移し、情の深さを味はひのこまやかさで量り、生の豊麗を肉感の豊麗に求めた。さうして總てを變化の故に、新味の故を尙んだ。かうして私は生の深祕を攪むと信じながら、常に核實を遠退いてゐたのであつた。それ故に私は眞の勇氣を怯懦と感じ、眞の充溢を貧弱と感じた。それ故に私は腐臭を帯びた人間を價值高きものとして尊敬した。嗚呼。何と云ふ自分だらう。私は何物をも愛しないで、たゞ冷やかに（たとへ感傷的であつたとしても）たゞ無責任に（たとへ金と約束とに於て責任を負つたとしても）總てを味はつて通らうとした。さうして彼らが私の腐敗の具體的證左となつた。

私は自分を呪つた。彼等をも憎んだ。彼等を愛することは、私には腐敗を愛することと同義になつた。彼等を愛したといふ記憶は自分が腐敗したといふ記憶に外な

らなくなつた。この記憶ある限り私は、時々自分の人格を疑はないではゐられない。腐敗を憎む限り私は、彼等をも憎まないではゐられない。

かうして私に一つの轉向が起つた。

五

然らば何故に私は彼等を捨てたことを苦しむのか。

私は自己の生を高める情熱に壓倒せられて、曾て嬉しかつたものが厭で堪らなくなつた。私は此の轉向をどうすることも出来なかつた。親しく交はつた彼等に對しても手加減をする餘裕などはなかつた。好きであつた時に逢ふことを好んだやうに、厭になつた時には逢ふことを厭がつた。表面上に交誼を續けて薄情の譏を避けるなどは、私には到底出来ないことであつた。私は徹底を要求するために、態度の不純に堪へ得ないがために、遂に彼等を捨てた。——それを何故に苦しむのか。

われ／＼のやうに小さい峠を乗り越えて來たものも、また自己を高める道の残酷

であることを感じないではゐられない。神の道は峻しい、神は残酷だ、と云つた哲人の言葉がしみ／＼と胸にこたへる。——もとよりこの場合に私は自分の行爲が「大きい不幸」を醸したとは思つてゐない。何故なら彼等の心はこの事によつて痛みを感じるにはあまり不死身だからである。しかし私は彼等が不死身であるか否かを考量した後に彼等を捨てたのではなかつた。私にとつては、彼等が痛みを感じる程度よりも、「曾て親しかつた者を捨てた」といふ行爲その者が問題になるのである。従つて人を傷けたか否かよりも、人を傷ける行爲をしたか否かゝ問題になる。私は正しく彼等の信頼を裏切つた。私の心には裏切られた人の寂しさが頻りに思ひ浮べられる。それだけで私には苦しむに十分である。

私は近頃T氏が總ての訪客を拒絶するといふ記事に度々出逢ふ。私はあれほど親切で優しかつたT氏がそのやうな残酷を敢てし得るのかと不思議に思つてゐる。何故なら私はT氏を訪ねて行く若い人たちの眞面目に道を求める心持に、今なほ或種

の同感を持ち得るからである。しかしまた私は、愛することを欲してゐるT氏が好んで残酷を選んだ苦しさを理解し得るやうに思ふ。さうしてT氏をその心持に押しつけて行つた責任を自分も亦別たなければならぬと感ずる。T氏に訪客と逢ふことの果敢なさを經驗させたのは訪客自身であつた。私たちは病人が醫藥を求めるやうにT氏から愛と智とを求めながら、やがて路傍の人のやうに冷淡になつた。時折なつかしい心でT氏のことを思ひ出しても、それを傳へるだけの熱心がない。それが如何にT氏の心を傷つけたかに就ては、私たちはあまりに無知であつた。T氏も亦弱い所の多い求道者であることを、興ふると共に受けなければならぬ乏しい愛の藏であることを、私たちはあまりに知らなさ過ぎた。私はT氏に對して濟まないと思ふ思ふ禁ずることが出来ない。

僅かに三四度逢つたT氏に對してさへさうである。まして彼等の場合は。——何と云つてもIやKは寂しいだらう。私は失つたためよりも、私の別離が凶兆として

響いたために。——かう私は考へる。私は薄情であつた。さうして唯一つの薄情でも、人生の果敢なさを思はせるには充分であつた。彼等の鼻端の強い誇り心は恐らくこの事實を認めまいとするだらうが、彼等の認めると否とに拘はらず、私は彼らを傷つけたことを信じ、さうして絶えず濟まないと思ふ。

私は自己を高めるために薄情を避けなかつた。しかしどんな背景があらうとも、薄情であつたことは苦しい。私はどうにかして彼等を愛し續けたかつたと思ふ。彼等の内にも愛らしい所がひそんでゐたらうと思ふ。私にそれが不可能であつたことは私の愛の弱小を證明するに過ぎないだらう。私は彼らをも同胞として抱擁し得るやうな大きい愛を嘯みたい。私はさういふ愛の芽生が力強く三月の土を擡げかゝつてゐるやうに感ずる。

春が來た。春が來た。眞實の生の春が來た。總てはこれからだ。

私は彼等を再び愛し得るやうになつても、彼等を動かしてゐる傾向を再び愛することは、決してあるまい。

この傾向を焦點として見れば、彼等は享樂の他に生活を持つてゐない。彼等は共に全身を以て、全生活を以て享樂しようとする。彼等は内面外面のあらゆる道徳を振り捨て、人の恐れる「底」に沈淪する事を喜ぶ。聖人が惡とする所は彼等には善である。しかもそれは惡と呼ばれる故に一層味ひが深い。眞情、誠實、生の貴さ、緊張した意志、運命の愛、——これらは彼等が唾棄して惜しまない所である。個性が何だ、自己が何だ、永遠の生が何だ、それらはふくよかな女の乳房一つにも價しない。乾物のやうな思想と言葉とを振り捨て、汝の心奥の聲を聞け。汝の核實は、汝の本能は、生の美しさをのみ求めてゐるだらう。肉の delicacy 感覺と感情の醉歡、そこにのみ最高の美があるのだ。氣儘な興奮と浮氣な好奇心となげやりな勇氣とがそれを汝に持ち來たすだらう。それを外にして何處に最も好く生きる道があるのだ。

かう彼等は云ふ。

これも一つの人生觀である。一つの態度である。しかし私はそれを征服すべく努力するやうに運命づけられてゐる。私にとつては生は精神的に無限に深い。生の美しさは個性と持續とのなかからのみ閃めき出る様に思へる。斷片的な享樂の美は私には迷はしに外ならない。

またたとへそれを一つの態度として許しても、そこには内在的な批評の餘地があると思ふ。即ち彼等は果してその態度を徹底させてゐるか。もしくは徹底させようといふ要求に燃えてゐるか。——私は思ふに、彼等日本 Aesthet の危険は、Aesthet としてさへも徹底し得ない所にある。もしくは徹底しようと思ふ所にある。彼等は遂に如何なる意味の生活をも築き得ない危険に瀕してゐる。——例へば彼等は嘘をつく。嘘は Aesthet にとつて捨て難い味のある方法に相違ない。しかし彼等はともすれば嘘を以て社會と妥協しようとする。しかも驚くべきことには、彼等は

その嘘を意識しないのである。彼等は時に情の厚い誠實な男として振舞ふ。さうして自らさうだと信じてゐる。そこへ或事件が起る。彼等は極度の不誠實を現はす。しかもなほ自ら誠實な男だと信じてゐる。最も徹底したやうに見えるJに於てさへもさうである。彼はその全興味を注いで、享樂を尊重するために、人間の尊貴と美とを蹂躪するやうなものを書く。ここでは彼は悪と醜の讚美者である。しかも彼を悪人と呼び醜怪と呼ぶ者に對して彼は怒る。製作の上では價値を倒換しても、日常生活に於てはその倒換を欲しない。

視點を製作にのみ限る時には、事情は稍異つて來る。この範圍でJは態度の純一を缺かない。彼は官能享樂にのみ價値を認めて、誠實にそれを徹底させる。製作に於ては決して嘘をつかない。彼の製作の趣味が低劣だといふ批評は倫理的立場から來るのであつて彼の態度の不純によるのではない。それに比べると趣味が上品で綺麗だとせられるIの製作は態度の不純のために堪らなく愚劣に感じられる。彼は内

心に喜んでゐながら恥ぢたらしく装ふ。歡喜を苦痛として表現する。總てが嘘である。——Kはその軟弱な意志の故に Aesthet として生きてゐる。彼は他の世界にはいらうとして躓く。さうして常に官能の世界に歸つて來る。しかしそこでも彼は落ちつくことが出來ない。彼は絶えず自分を嘲つてゐる。彼は Aesthet として徹底するには、あまりに精神的であり、またあまりに精神的でなさ過ぎる。もし彼に強い意志があつたならば、さうして Aesthet となるべく運命づけられてゐるならば、彼は先づ精神的傾向を彼がなしたよりもつと深い所まで押し詰めるだらう、さうしてそれを地に打ち砕くだらう。それは Aesthet として徹底する道であると共に、また更に、高い世界へ轉向する可能性を激成する道である。けれども彼にはそれがない。彼の製作は如何にも突き入つて行く趣を缺いてゐる。總てが核心に觸れてゐない。

このやうな三人の相違は、ふと私に三つの聯想を起させた。Jには Faun の面影

がある。彼は自分の醜い姿を水鏡に映して見て、抑へ難い歡喜を感じるらしい。彼はその歡喜を衆人の前に誇示して、Faunらしく無恥に有頂天に踊り廻るのである。私たちに嘔吐を催はさせるものも、彼にはEkstaseを起す。私たちが赤面する場合に彼は哄笑する。彼は無恥を焦點とする現實主義者である。(私も一度はそれであつた。暫らくの間はその中で快活に踊ることも出来た。しかしその間に心の眼は根元の醜さを見た。私は一度振りほどいた繩目の貴さを漸く悟つて、再び自ら縛に附いた。私の羞かしさは無垢の羞かしさではなくて、懺悔の羞かしさである。)——Iには賣女を思はせるものがある。おしろいの塗り方も髪結び振りも着物の着こなしも總て隙がない。delicateな印象を與へ清い美しさで人を魅しようとする注意も行き互つてゐる。しかもそこに總てを裏切る或物の閃きがある。人は密室で本性を現はす無恥な女豚を感じないではゐられない。——Kは生ぬるいメフィストを聯想させた。彼は自己の醜さを嘲笑する。しかし醜さを焼き滅ぼさうとする熱欲がある

からではない。彼は他人の弱所を突いて喜ぶ。しかし惡を憎む道德的疝癩からではない。

——こゝまで考へて來ると、ふと私は一つの危險を感じ出した。彼らの現はす傾向に就ては、たとへ全然捨離し得たと云へないまでも、最早自分に危險はあるまい。しかしこの敵と戦つてゐる間に、他の敵が背後へ廻つてゐた。私はそれを味方と信じてゐたが、しかしその味方のために足をさらはれることがないとは云へない。

それは私の内のメフィストである。私は自分に淨化の熱欲と道德的疝癩とがある故を以て、自分のメフィストを跳躍させて好いものだらうか。それは自己と同胞とに對する愛の理想を傷けはしないだらうか。私は彼らの弱所を氣の濟むまで解剖した所で、どれだけ自分の愛を進め得たらうか。怒は怒を煽る。嘲罵は嘲罵を誘ふ。メフィストも亦メフィストを誘ひ出すだらう。

私はまた事を誤まつたのだらうか。

七

私は人の長所を見たいと思つてゐる。さうしてなるべく多くの人に愛を感じたいと思つてゐる。しかし私には思ふほどにそれが出来ない。

私が愛を感じてゐる人の短所は、同情を以て見ることが出来る。時にはその短所の故に成長が早められてゐるとさへも思ふ。しかし愛を感じない人の短所は、多くの場合致命的に見える。私はともすればさういふ人の長所や苦しみや努力を見脱して了ふ。さうしてその際、自欺の衣を剥ぎ偽善の面をもぐ様な、思ひ切つた皮肉の矢を痛がる所へ射込む、と云ふことに、知らず知らず興味を感じてゐないとは云へない。

私は曾てこの様な興味に強く支配されてゐたこともあつた。その頃は總ての事物に醜い裏が見えて仕方がなかつた。多くの人の言動には卑しい動機が見えすいて感じられた。風習と道徳には虚偽が匂つた。私はそれを嘲笑せずにはゐられない氣持であつた。さうして自分の態度の輕薄には氣附かなかつた。

これに氣附いたのは私には一つの契機であつた。私は自分の過去を恥ぢ、呪ひ、

さうして捨てた。出来るならば私はそれまでに書いたものを總て人の記憶から消し去りたいと希つた。もう筆を取る勇氣もなかつた。私はその時に自己表現の情熱を中斷されたやうに思ふ。その頃は知人と口をきくことさへも私を不安にした。私は出来るだけ知人を避け、沈黙を守つた。愛と誠實とに動かされない場合は何事も云はず何事も書くまいと誓つた。

かうして一年以上私は狭い自分の周圍以外に眼と口を向けなかつた。その間に私は自分を鑄直ほすことが出来たつもりであつた。

しかしメフィストはなほ自分の内に生きてゐる。彼の根柢は意外に深い。事毎に彼はピョイピョイ飛び出して来る。さうしてその瞬間に私は彼を喝采する心持になつてゐる。たとへ直ぐそのあとでそれを後悔するとしても。

私は二三日前に一人の女の不誠實と虚偽と淺薄と脆弱と浮誇とが露骨に現はされてゐるのを見た。しかし私は、興奮して鼻の先を赤くしてゐる彼女の前に立つた時憐愍と齒がゆさのみを感じてゐた。性格の弱さと浮誇の心とが彼女を無恥にし無道徳にしてゐる。彼女の意志を強め、彼女に自信を獲得させることが、やがて彼女を救ふことになるだらう。より強い力を内より湧き出させるのが、自欺を破つてやる最良の方法であるのだから。かうして私は彼女を優しく勞はることが出来た。——一時間経つた。私は何時の間にかメフィストであつた。女の心の隅々から虚偽と惡徳とを掘り出し、それを容赦のない解剖刀で切り開いて見せる。私は熱して、力を集注して、それをやつてゐた。傷いた女の誇り心の反撥が私を益々刺戟した。女が最後の武器として無感動を装ふのを、更に摘發し覆さなければ止まないほど私は殘酷であつた。——さうして結果はどうなるのか。女はますます無恥であるやうに努力するだらう。私にはたゞ後悔が残つた。

他人の製作に對する私の心持にも同じやうなものがないとは云へない。例へば私は四五日前に大家と稱せらるゝ或人の感想を讀んでその人の製作を考へて見た。彼は「事實」に即するつもりである。又實際「事實」を持つてゐる。しかしそれは淺い生ぬるい事實に過ぎなかつた。けれども彼はもつと深い事實を示す多くの思想や言葉を知つてゐる。彼はそれを自分の淺い事實に引きつけて考へる事によつて、外形的に自分をそれらの思想の高さまで高めて行つた。その結果として彼は自分の知らない事を描きまた論じてゐる。彼は深い語を輕々しく使ふ。淺い事實を深さうに表現する。問題の入口に停まつてゐながら問題を解決したつもりになつてゐる。彼は身の程を知らないのである。彼は虚偽を排する主義を奉じてゐるが、それを徹底させるためにも淺い體驗はたゞ淺い儘に表現すべきであつた。一切の借物を捨て、自分の直視にのみ即して考へて見るべきであつた。——かう考へてゐる内に、彼の感想の内から二つの語が自分の批評の證明として心に浮んだ。彼は「徹底」に就て

語りながら云ふ、徹底を云ふ人が案外に徹底してゐない、云はぬ人に反つて徹底したのがある。これは事實である。問題にならないほど解り切つた事實である。しかも彼はこの語で徹底を説くものを論破したつもりになつてゐる。これによつても彼が曾て「徹底」を問題としなかつた事は明かである。何故なら彼の態度には、徹底を要求する者の苦しみと努力とに對する些かの同情も同感も現はれてゐないからである。徹底し切れない所に徹底を要求する者の種々な心持がある。それを見得ない人にどうして「徹底」を論ずる権利があらう。彼は自らを「徹底した人」に擬してゐるかも知れないが、そのやうな徹底は恐らく矛盾を意識しない無知な妥協の安逸か、或は物の見方や扱方の凝固に過ぎないだらう。——彼はまた所有の欲望を嘲つて、自分の家庭の經驗より見ても所有は不可能だと云ふ。これがまた彼に所有の要求のないことを、従つて所有の要求を解し得ないことを示してゐる。眞に所有の要求に燃えてゐる者に、(或は燃えてゐた所に) どうしてそれが不可能だと云ひ切れ

るだらう。自分にそれ程の力がない、(或はなかつた)と呟く心持にはなることもあるが、しかしそれは自己を嘲る根據にはなつても、他人の嘲る根據にはなり得ない。正しく彼は自分の浅い生温い經驗から押して、自分の知らない世界のことを横柄に批評したのである。……

かう云ふ論證は私を好い氣持にした。私は彼と彼の一味との淺薄な醜さを快げに見下した。さうして彼の永い間の努力と苦心と功績とを一切看過した。私はそこに自分の愛の狭さを感じる。この種の心持が屢々他人の製作に對して起つてゐるのではないかと、自分を憂へないではゐられない。愛なき批評を呪ふやうになつた私は、もはや氣輕に他人を非難する度胸がなくなつた。

八

シヨオとドストイェフスキイとに一種の類似がある。それは知的と心理的とに特色を有する表現法が因をなしてゐるかも知れない。しかし私は特に彼らの内からメ

フィストが首を出してゐる所にそれを認めたい。さうしてまたそこに彼らの大きい相違をも認めたい。

シヨオが社會に對して浴びせかける辛辣な皮肉の裏には、彼の理想の情熱と公憤とが燃え上つてゐる。しかし彼の製作にはしんみりした所がまるでない。彼は愛の溢れた人間をも、道に苦しむ人間をも、描くことが出来ない。畢竟、彼は人類の姿を描き出すことが出来ない。彼には惡を憎む心のみあつて憐愍がない。この關係を彼のメフィストが示してゐる。彼のメフィストは否定の矢をたゞ偽善者の上に——臭いものを覆うた蓋の上に——のみ向けるのである。彼は破壊を喜ぶが、しかし眞に善きもの美しきものを破壊しようとはしない。云はば正義の騎士に商賣換をしたメフィストである。従つてこのメフィストはファウストを持つてゐないのである。さうしてまた、シヨオ自身の内にも、ファウストは全然ゐないらしい。彼は善の塊のやうに、自己を築き了つた人のやうに、安固として動かない。彼は自己鍛鍊の苦

しい道を経ないで、社會救済の自信と力とを得た人のやうに見える。彼はその理想の情熱と公憤との權利を以て、何の遲疑する所もなく、大膽に滿腹の嘲罵を社會の偽善と不徹底との上に注ぐのである。

しかしドストイェフスキイのメフィストは常にファウストに添つて現はれて來る。眞の生を求めて泣き、苦しみ、恐れ、絶望する「人間」の傍にのみ、メフィストはその意義を持つ。彼は社會の惡と人間の愚とを罵るが、しかしそれは社會を救済する爲めではなくて、ファウストを誘惑しファウストから「人間」に對する愛と信頼とを奪ふためである。道を求むる人は必ず一度はこの試みに逢はねばならない。ファウストはこの誘惑を切り抜けて、社會と人間とを愛し續ける。さうしてドストイェフスキイは、この愛を以て人間を救済しようとするのである。彼の描くのは「個人」とその歩んで行く「道」とである。彼の努力の焦點は自己の永遠の生を築くことである。それはたゞ愛によつてのみなされる。さうしてそこに人類の救済があ

る。彼は悪を罵つてゐるのみには堪へられない。悪の故に人間を憐み、自ら苦しむ。大きい愛、宗教的な愛………

——こゝにこそ自分の行くべき道があつた。私は自分の内にメフィストが住むのもまた無意義でなかつたと思ふ。メフィストがゐなければ私の世界も寂しいだらう。メフィストは私の世界を押し廣め、多くの心理や見方を教へて呉れる。それを機縁として私のファウストが眞の叡智を得て行くのである。……メフィストを跳梁させたいけない。しかしメフィストの故に苦しむのは好いことだ。メフィストがあまりに早く離れ去らなかつたことは、喜ばなくてはいけないだらう。メフィストの居ることも私には好い刺戟になる。シヨオのメフィストのやうにならない限りは。シヨオを離れることの出來たのも私には一つの轉向であつた。

二 生きること作ること

一

私は近頃、「やつと解つた」といふ心持にしばしば襲はれる。對象は大抵これ迄知り抜いたつもりでゐた古馴染のことに過ぎない。しかしそれが突然新しい姿になつて、活々と私に迫つて来る。私は時にいくらかの誇張を以て、絶望的な眼を過去に投げ、一體これ迄に自分は何を知つてゐたのだとさへ思ふ。

例へば私は affectation の厭なことを昔から感じてゐる。その點では自他の作物に對してかなり神経質であつた。特に自分の行爲や感情に就てはその警戒を怠らないつもりであつた。然るに或日突然私は眼が開いた氣持になる。そして自分の人間と作物との内に多分の醜い affectation を認める。私はこれまで何故それに氣が附かな

かつたかを自分ながら不思議に、また腹立たしく思ふ。affectation が何であるか、それがどう云ふ悪い根から生ひ出でて来るか、それはまるきり解つてゐなかつたのである。何といふ馬鹿だ、と私は思はないではゐられない。

さう云ふ時には自分の悪いことばかりが眼につく。自分の理解を疑ふ心が激しく沸き立つ。「人生を見る眼が鈍く浅い。安價な自覺で好い心持になつてゐる。自分で自分を甘やかすのだ。」かう自分で自分を罵る。そして自分の人格の慘めさに息の詰まる様な痛みを感じる。

しかしやがて理解の一步深くなつた喜びが痛みのなかから生れて来る。私は希望に充ちた心持で、人生の前に——特に偉人の内生の前に——もつと謙遜でなくてはならないと思ふ。そして底力のある勇氣の徐々に蘇つて来ることを意識する。

二

たゞ「知る」だけでは何にもならない、眞に知ることが、體得することが、重大な

のだ。——これは古い言葉である。しかし私は時々今更らしくその心持を経験する。

——誰でも自分自身のことは最も好く知つてゐる。そして最も知らないのはやはり自己である。「汝自身を知れ」と云ふ古い語も、私には依然として新しい刺戟を絶たない。

思索によつてのみ自分を捕へようとする時には、自己は霧の様に掴み所がない。しかし私は愛と創造と格闘と痛苦との内に——行爲の内に自己を捕へ得る。そして時には、思はず顔を背けようとする程ひどく參らされる。私はそれを自己と認めたくない衝動にさへ驅られる。しかし私は絶望する心を鞭つて自己を正視する。悲しみのなかから勇ましい心持が湧いて出るまで。私の愛は戀人が醜い故に益々募るのである。

私は絶えずチク／＼私の心を刺す執拗な腹の蟲を斷然押へつけて了ふつもりで、近頃或製作に従事した。静かな歡喜がかなり永い間續いた。その故に私は幸福であ

つた。或日私は可愛い私の作物を抱いてトルストイとストリンドベルヒの前に立つた。見よ。その鏡には何が映つたか。それが果して自分なのか。私は忽ち暗い谷へ突き落された。

私は自分の製作活動に於て自分の貧弱をまぎ／＼と見たのである。製作その者も、そこに現はれた生活も、かの偉人たちの前に存在し得るだけの權威さへ持つてゐなかつた。私は眩暈を感じた。しかし私は踏み留まつた。再び眼が見え出した時には、私は生きることと作ることとの意義が「やつと解つた」と思つた。私は自分を愧ぢた。と共に新しい勇氣が底力強く湧き上つて來た。

親しい友人から受けた忌憚なき非難は、反つて私の心を落ちつかせた。烈しい苦しみと心細さとのなかではあつたが、自分にとつての恐ろしい眞實をたじろがずに見得た經驗は私を一步高い所へ連れて行つた。私は黒い鐵の扉に突き當つたが、自分の力で動かし難い事を悟ると共に、鍵穴を探し出す餘裕を取返したのである。

三

トルストイやストリンドベルヒの作物を讀んで見る。語の端々までも峻嚴な藝術的良心が行き互つてゐる。はち切れるやうな力が語の下から覗いてゐる。短い描寫が驚くべき豊富な人生を示唆する。

所で自分はどうであらう。強調すべき點は氣が濟むまでも詳しく書かうとする。そのために空虚な語のはいつて來ることには氣附かない。従つて多くを示唆する少ない語の代りに、少なくを説明しようとする多くの語がある。しかも熱に浮かされた自分にはその空虚が充溢に見えるのである。

大業に仕過ぎるといふことは若い者にあり勝ちの缺點かも知れない。重大事を重大事として扱ふのに不思議はないと思ふから。しかし引きしめて控へ目に、たゞ核實のみを絞り出す事は、嘘を書かないための必須な條件であつた。製作者自身は眞實を書いてゐるつもりでも、興奮に足をさらはれて手綱の取り方を忽にすれば、書

かれた物の内からは必ず虚偽が響き出る。大業にすることは即ち致命傷であつた。私はこの點に自己を警戒すべき重大事を認めた。如何に苦しんでも苦しみ足りるといふ事のないこの人生を、私はともすれば調子づいて軽々しく通つて行く、そしてその凝視の不足は直ちに表現の力弱さとして私に報いて來るのである。私はもつと確かりと大地を踏みしめて、あくまで浮かされることを恐れなくてはいけない。生活態度の質實はやがて製作態度をも質實にするだらう。製作態度の質實はやがて表現の簡素と充實とをもたらすだらう。

私は藝術的良心が生活態度の誠實でない人の心に榮えるとは思はない。

四

佛蘭西や伊太利の作家には饒舌が眼につく。私はダヌンチオやブウルヂェエの冗慢に堪へ切れない。トルストイに至つてはさすがに偉大である。例へばあの大部なアンナ・カレニナのどの頁を取つて見ても、私は極度に緊縮と充實とを感じるのである。

ドストイェフスキイを冗慢だとする批評はかなり古くからあるが、私は冗慢を感じない。内容がはち切つてゐるから。——尤も技巧から云へばかなり隙がある。夏目先生はカラマゾフ兄弟の或點をディクンスに比して非難された。その時私は承服し兼ねたが、しかし考へて見ると私はディクンスの本體を知らない。それにドストイェフスキイには浪漫派らしい弱點がある。恐らく夏目先生の非難は當つてゐるのだらう。

けれどもドストイェフスキイの偉大な内生活は表現の上の缺點を消して了ふ。カラマゾフ兄弟は我々の新しい聖書である。そこには「人間」の心が隅から隅まで書き現はされてゐる。そして生の渦卷の内から一道の光明を我々に投げ掛ける。

ストリンドベルヒに至つては、その深さと鋭さに於て——簡素と充實とに於て近代に比肩し得るものがない。また心理と自然と社會との観察者としても、露西亞の

巨人の壘を摩する。彼も亦「人間」の運命を描いた。そして我々に新しいファウストを與へた。

私は近頃彼の「赤い室」をゾラの「巴里」と比較して見た。彼がゾラの影響の下にその處女作を書いたことは疑ひがない。しかし驚くべき事は三十歳の青年が自然主義の初期に既にゾラを追ひ越しモウパッサンの先を歩いてゐたことである。題目とねらひ所は兩者殆んど同じで、構圖さへも似通つてゐるが、ゾラの百頁を費す所は彼の筆によれば僅かに二三十頁で済む。しかも描寫が具體的で事實に迫つてゐる點では、ゾラは遙かにはなはない。ゾラには強く作爲の匂ひがする。そして心理が淺く且足りない。その上かなり冗慢である。ストリンドベルヒはこれに反して社會の斷層を描くのに自傳的の匂ひを以て貫ぬいてゐる。心理は鋭く、描寫はカリカチュアに近い程鮮かである。しかも彼の心理觀察の周密は常に描寫のカリカチュアにするのを救ふ。従つて彼の描寫は簡素の限度だと云ふ事も出来る。

ストリンドベルヒの頭は恐ろしく好い。ゾラの頭は極めて平凡である。

五

告白の欲望はともすれば直ちに製作衝動と間違へられる。素より體驗の告白を地盤としない製作は無意義であるが、しかし告白は直ちに製作ではない。告白として露骨であることが製作の高い價值を定めると思つてはいけなない。けれどもまた告白が不純である所には藝術の眞實は榮えない。私の苦しむのは眞に嘘をまじへない告白の困難である。この困難に打ち克つた時には人はかなり鋭い心理家になつてゐるだらう。今の私はなほ自欺と自己辯護との痕跡を、十分消し去ることが出来ない。自己辯護はともすれば浮誇にさへも流れる。それ故私は苦しむ。眞實を愛するが故に私は苦しむ。

六

私は自分に聞く。——お前にどんな天分があるか。お前の自信が蟲の好い自惚れ

でない證據は何處にあるのだ。

そこで私は考へる。——私には物に喰ひ入るかなりに鋭い眼がある。一つの人格、一つの世相、一つの戦、その秘められた核を私は一本の針で突き刺して見せる。その證據は私の製作が示すだらう。

そして私は製作する。出来たものを例へばストリンダベルヒの作に比べて見る。何といふ鈍さと貧弱さだらう。私は羞恥と絶望とで首を垂れる。

微妙な線、こまやかな濃淡、魔力ある抑揚、秘めやかな諧調、さう云ふ技巧に於ても亦、私の生れつきの自惚は製作によつて裏切られる。要するに私は要求と現實とを混同する夢想家に過ぎなかつた。

かうして私は自分の才能に失望してかなり苦しむ。しかし私は思ふ。私の問題は與へられた物が何であるかに——私の *Weg* にあるのではなかつた。私はたゞ與へられた物を愛し育てるために生きてゐるのであつた。私はたゞ自分の愛の力の弱

らない様に、また與へられた物の發育の止まらない様に心配してゐれば好い。私の苦しみと愛とで恐らく私の生活の價値は徐々に築かれて行くだらう。

運命を愛せよ。與へられた物を呪ふな。生は開展の努力である。生の重點はこの努力にあつて、與へられた物にあるのではない。呪詛は生を傷ひ、愛は生を高める。たゞ愛せよ、そして總てを最も好く生かせよ。——かうして私は喜悅と勇氣とに充たされる。天分の疑懼は暫くの間私の心を苦しめなくなる。

天才はその悲痛な運命の愛によつてのみ非凡であつた。彼らは多くを與へられた事よりも、寧ろ多くを最も好く生かした事に於て偉大であつた。私はその驚嘆すべき誠實の故にのみ彼らの前に跪く。

そして私は自分に聞く。——お前は誠實か。お前の努力は最大限まで行つてゐるか。それが自欺でない證據は何處にあるのだ。

七

人生は戦である。そして戦の大小深淺がまた人間の價値を左右する。

戦ひの態度の純一は、複雑な内生よりも、單純な迷ひのない生活に遙かに起り易い。それ故唯純一の故に意を安めてはいけぬ。純一の態度に固執する者はともすれば内容を空疎にする。

私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が群をなして沖から歸つて来る。そして鳩が地へ舞ひ下りる様に、徐々に、一艘づゝ帆を下して半町程の沖合に屯した。岸との間には大きい白い磯波が巻き返してゐる。何時の間にか薄穢ない老人と子供とが岸邊に群がり立つた。やがて、體の好い若者の揃つた舟が最初に突き進んで来る。磯波は烈しく押し戻す。綱が投げられる。若者が波の間へ飛び込んで行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは綱を引くものが諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足を揃へ、聲を合はせて舟を砂の上に引ずり上げて行く。

一艘上がると共に、舟にゐた若者たちは直ちに綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗り掛ると、丁度綱を荒れ廻る鹿の角に投げ掛ける様に、若者は舟へ綱を投げる。そして他の若者たちは躍り掛つて、肩をあてゝ一氣に舟を引き上げる。かうして次から次へと數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人數は益々殖える。舟は益々面白さうに上つて来る。老人と子供と女房たちは綱に捕まつて快活に跳ねてゐる。誰が命令すると云ふでもないのに、一團の人々は有機體のやうに完全に協力和分業とで仕事を實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見まもつた。海のと戦ふ人間の姿。……集中と純一とが最も具體的な形に現はれてゐる。……力の充實……隙間のない活動。——一人の少年が兩手を高く舉げて波のなかに躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追ひ縊る。やがて板切を抱いて水を跳ね飛ばしながら駆け上つて来る。——生が踊り跳ねてゐる。生が自然と戦ひそれを征服してゐる。

私はそこに現はれた集中と純一と全存在的な活動との故に暫し恍惚とした。

この氣持の好きは我々が總ての活動に追ひ求めて居る所の一種の法悦であつた。我々の内にも亦、生の焰はかく燃え上らなくてはいけない。まことにそれは生本來の姿であり、また生本來の歡喜である。

かうして漁師の群の活動を眺めてゐる内に私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じ出した。私は漁師の群に投じて共に働くか、でなければ傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を極めなければならなくなつた。そして私の頭には百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐すべきあの「考へる人」の姿とが、相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして、左の肱を右の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、——そして考へに沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた。漁師の群に貴い集中と純一とを認めたのは私の心に過ぎなかつたではないか。彼らが濱から家へ歸る。そこにはもう貴さはない。彼らは波と戦つて勇ましく打ち克つ。しかし敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼らはもう立派な戰士ではない。彼らの活動は眞生の面影を暗示する。しかしそれは彼ら自身の生活ではなかつた。彼らは低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

私は複雑な、深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐる慘めな醜さを心に浮べた。そこにある苦しい戦ひは、裸になつて冬の海に飛び込むことによつては、解決されさうにもなかつた。私はたゞ自分の遣り方で、自分の内生に、あの集中と純一とを獲得する外はない。そのためには私の總ての戦を終局まで戦はなくしてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活の慘めさは、目下の自分の力では如何ともし難い。

私は一つのことを悟り得た。迷ひと屈托とに遲滞してゐる故を以て、直ちにその人の人格を卑しめてはいけない。態度の純一の故に、直ちにその人の人格を過大視

してはいけない。態度の美しさの外に、なほ一つ、戦の深さによつて人を見る視點があるからである。

八

私は誤解を恐れる。そしてその恐れを愧ぢる。私はその恐れに打ち克たなくてはならない。

もとより誤解は不愉快である。出来るならばそれを解きたいと思ふ。たゞ言葉の間違ひや事件の行違ひの他に根のない誤解ならば、解くこともまた易い。

しかし私は、人格の相違が誤解を必然ならしめる場合を少なからず經驗する。それを解き得るものはたゞ大きい力と愛とである。私はその爲には未だあまりに弱い。私のなすべきことは、誤解を氣にしないで唯力と愛とを強め育てる所にのみあるのだつた。

相手の人格が頑固野卑である場合には、誤解を解くことは益々難かしい。耶蘇で

さへそれを解き得なかつた。

私は群集の誤解を恐れてはならない。そして誤解を解くための焦燥などは絶対にしてはいけない。容易く群集に理解されることは危険である。群集の喝采は必ずしも作者の勝利を示しはしない。虚偽と阿諛に充ちた作品をさへ喜ぶ人々の喝采は、恐らく不愉快なものだらうと思ふ。

萬人の胸を潤す物を作ることは我々の理想である。我々は端的に「人間」の心に迫つて行かなくてはならぬ。しかし未だ力に乏しい私の眼には、それが殆んど不可能に見える。深いものを見得るのはたゞ少數の人々に過ぎない。大多數の人々を共通に動かし得る物は、今の所、センチメンタリズムの他にないだらう。

誤解を恐れるな。たゞ眞實の道を歩め。

九

怒を以て怒を鎮める事は出来ない。主我心を以て主我心を碎く事も出来ない。そ

れをなし得るのは唯愛のみである。

怒は怒を煽り、主我心は主我心を高める。もし他人の怒と主我心を呪ふならば、先づ自己の内の怒と主我心とを征服せよ。まことの愛はその時初めて湧き出るだらう。

一〇

私は彼を愛し、尊敬し、恐れ、憐み、そして侮蔑する。

私は愛する者、尊敬する者、恐れる者、憐む者、侮蔑する者を持つてゐる。また愛し尊敬する者、愛し憐む者、憐み侮蔑する者を持つてゐる。尊敬し恐れる者、恐れ侮蔑するものもないではない。私はこれら對人感情を唯一つの大きい愛に高めようと努力する。そのために絶えず自責の苦しみがある。複雑に結びついた感情ほど不安を起す程度が甚だしい。

しかしこれらの感情の總てが一個人に集まるのは、唯彼に對してのみである。それ故に彼は何人よりも激しく私を不安ならしめる。私は一人でゐて彼の名を思ひ浮べただけでも、もういら／＼し初める。そしてそのいら／＼する事が自分ながら癩に障る。

彼に對する私の態度は純一の正反である。それが恰も、彼に打ち碎かれた様な感じをさへ私の内に起させる。私は彼の前に跪くことは出来ない。そのくせ跪かうとしてゐる者の様にうろ／＼してゐる。

私は彼よりもつと愛し、もつと尊敬する人を持つてゐる。私の生活に喰ひ入つてゐる點から言へば、彼と私との間には左程深い關係はない。しかし彼は最も辛辣に私の注意を刺戟する。従つて私の意識を占領する度数が非常に多い。彼の特質がこの刺戟性がないとは云ひ切れまい。

彼の現在は未知數である。彼が私の注意を引くのは價值が高い故でなくて價值が未だ現はれないからである。彼は確實性の代りに不安定を以て、力の代りに豫感が

以て、形の代りに影を以て、思想の代りに情調を以て、何者かをほのめかす。彼は實を以て人に迫らずに虚を以て人を釣るのである。彼が偉いか偉くないか、私は知らない。

私は彼に惱まされることを愧ぢる。しかしその刺戟の故に彼に感謝する。

一一

私はかう云ふ事を夢みてゐる。——私は自分の體驗から、私のファウストを書かねばならぬ、と。この夢想の情熱は、解らないなりにファウストを讀んだ少年の時から年と共に、經驗と共に、高まつて行く。

もとよりそこには、ファウストを書き得た偉大な人格のやうに、高く全く自己を築き上げようとする欲動がひそんでゐる。そしてその欲動の故に自己を悲觀し自己を鞭つ。

私の考へでは、私の夢想するファウストは私の愛がゾシマの様に深くならなくて

はとても書けさうにない。今の私の愛は愛と呼ぶにはあまりに弱い。私はまだ愛するものの罪を完全には許し得ないのである。愛するものの運命を悉く擔つてやることも出来ないのである。それ所ではない。迷ふ者を憐み、怒るものを勞はることもすらもなし得ない。力の不足は愛の不足であつた。我を張るのは自己を殺すことであつた。自己を愛に於て完全に生かせる爲には、私はまだく愛の悩み主我心の苦しみを——愛し得ざる悲しみを——感じてゐなくてはならない。

しかし私はこの愛の理想の故に一つの「人間」の姿を描きたいと思ふ。主我心の蛇に喉を嚙まれながら、遙かなる蒼空を見上げてゐる「人間」の姿を。

それは實に人類の運命であつた。人は誠實に生きる限り——生を避けて、生きながら死んだものにならない限り——才なき者は才なき儘に、弱き者は弱き儘に、人類の運命を象徴するのである。

それ故私は、現在の自分も亦小さい一つのファウストを描く権利を持ちたい。私

は體驗の渦卷のなかにゐる。そこに一つの Leitmotiv が現はれる。そして磁石の様に砂のなかから唯鐵のみを吸ひ上げる。それは殆んど本能的である。かくして作られたる體驗の體系は、一つの新しい生として創造の名に價する。

唯しかし、その體驗が淺薄な故に偽りを含んでゐるとしたら――

三 ベエトオフエンの面

—

人生が苦患の谷であることを私も亦しみんと感じる。しかし私はそれによつて生きる勇氣を消されはしない。苦患のなかからのみ、眞の幸福と歡喜は生れ出る。

或人は云ふだらう。歡喜を産む苦患は眞の苦患でない。苦患の形をした歡喜は眞の歡喜でない。お前は苦患をも歡喜をも知らないのだ。お前の體驗はそれ程に稀薄だ。

しかし私は答へる。歡喜を産む可能性のない苦患は「生きてゐる人」にはあり得ない。苦患の色を帯びない歡喜は「生に觸れない人」にのみあり得る。そのやうな苦患と歡喜とは、息をしてゐる死人や腐つた頽廢者などの特權だ。

苦患は戦の徴候である。歡喜は勝利の凱歌である。生は不斷の戦である故に苦患と離れることが出来ない。勝利は戦つて獲られるべき貴い瞬間である故に必ず苦患を豫想する。我らは生きるために苦患を當然の運命として愛しなければならぬ。そして電光のやうに時折苦患を中斷する歡喜の瞬間をば、成長の一里塚として全力を以て擱まねばならぬ。

苦患の故に生を呪ふものは滅べ。生きるために苦患を呪ふものは腐れ。

二

シヨペンハウエルの哲學は苦患の生より生ひ出る絶妙な歡喜への讚歌であつた。生を謳歌するニイチエの哲學は苦患を愛する事を教ふる故に尊貴である。

苦患を乗り超えて行かうとする勇氣。苦患に焰を煽られる理想の炬火。そのない所に生は榮えないだらう。

三

私は痛苦と忍従とを思ふ毎に、年少の頃より眼の底に烙きついてゐるストウツクのベエトオフエンの面を思ひ出す。暗く閉ぢた二つの眼の間の深い皺。喰ひしばつた唇を取り卷く莊嚴な筋肉の波。それは人類の悩みを一身に擔ひおほせた悲痛な顔である。そして額の上には永遠に凋むことのない月桂樹の冠が誇らしくこびりついてゐる。

この顔こそは我らの生の理想である。

四

苦患を堪へ忍べ。

苦患に堪へる態度は一つしかない。そしてそれをベエトオフエンの面が暗示する。苦患に打向うて、苦患と取組んで、沈黙、靜寂、悲痛の内に、苦患の最後の一滴まで嘗め盡す。この態度のみが耐忍の名に價するだらう。

苦患に背を向け、感傷的に慟哭し、饒舌に告白する。かくしても亦苦患の終りを

經驗することは出来る。しかしそれを眞に苦しみに堪へたと呼ぶことは出来ない。卑近の例を病氣に取つて見よう。病苦は病の癒えるまで、或は病が生命を滅ぼすまで続く。言を換へて云へば、病苦は続く間だけ続く。病氣に罹つた以上は誰でも最後まで苦しみ通すのである。耐忍するもしないもない。しかも我々は病苦に堪へ得る人と堪へ得ぬ人とを區別する。同じ病苦を受けるにもそれ程異つた二つの態度があるからである。

「然り」と「否」と。受ける態度と逃げる態度と。生きる人と死ぬ人と。これが先づ人間の尊卑をきめるだらう。

五

生の苦患に對する態度に就ては、それが道德的に大きい意義を持つてば持つ程、より大きい危険がある。

病苦は號泣や哀訴によつて誤魔化すことは出来ても、全然逃避し得る性質のものでない。しかし精神的な生の悩みは、露出させる事によつて誤魔化し得る他に、また全然逃避することも出来るのである。

或内的必然によつて意志を緊張させた場合を想像する。喩へて云へば、或理想の爲に重い石を両手で捧げるのである。腕が疲れる。苦しくなる。理想の焰に焼かれ、てゐる者は、腕がしびれても、眼が眩んでも、齒を喰ひしばつてその石を捧げ続ける。彼の心は、神の手がその石を受取つて呉れる瞬間のために喘いでゐる。しかしこれと異つた態度の人は、腕が疲れて來るに従つて、石を大地に投げ捨てた時の安樂と愉快を思ふ。そして自分に囁く。「こんな石を捧げてゐるのは馬鹿々々しいではないか。これを投げ捨てれば俺の生は自由に輕快になるだらう。そこに眞の生活があるのだ。」かう云ふ自己是認が出來ると共に、石が地に落ちる。彼は苦患を脱する。

かうして或種の人々は生から逃げ出して行く。そして漸次に息をしながら死んで

行く。何物も人格に痕を残さない。人格は一步も成長しない。腐敗が何時の間にか核實にまで及んでゐる。

六

製作の苦しみは直ちに生の苦しみであるとは云へない。製作の苦しみが人格の苦しみに根を持つ時、初めて貴むべき苦しみになるのである。

生活と製作とは一つでなければならぬ。これは自明のことである。しかしそれは戀をしながら同時に戀物語を書いて行くといふ意味ではない。製作は花、生活は根である。一つの生に貫かれてはゐるが、産む者と産まるゝ者との相違はある。偉大な花は深く張つた根からでなくては産れない。

眞に價値ある苦しみはたゞ根にのみ關する。大きい根から美しい花の咲かないことはあつても枯れかゝつた根から美しい花の咲くことは決してあり得ない。根の枯れるのを閑却して、唯花のみ咲かせようとあせる人ほど、馬鹿げた哀れなものはない。

いだらう。

しかしその哀れな人々が、大きい顔をして、さも生きがひありさうに働いてゐる。

七

お前の生を最も好く生きるために、

お前の苦しみを底まで深く苦しめ。

生が愛であることを、

愛が苦しみであることを、

苦しみが愛を煽ることを、

愛が生を高めることを、

お前のその顔に刻みつける。

四 放蕩息子の歸宅

放蕩息子よ。傷いた獸のやうに狂ひながら父の許に歸つた放蕩息子よ。

醉歡に疲れて霞すんだお前の眼には、慈愛の溢れた父の瞳の輝きが見えないのか。お前の歸宅を喜んで涙ぐんでゐる優しい同胞の顔が見えないのか。たとへお前の悔恨が根の浅い一時の氣分に過ぎなからうとも、たゞお前の姿をこゝに見るだけでお前を愛する人々の心は波うつ。嘲笑に對して過敏になつてゐるお前の胸を、この素朴な愛で暖めよ。さうして愛のまことをその儘に受け容れる無邪氣な心に歸つて呉れ。

私はお前の呟く言葉を聞いた。お前の浮氣な心が今脱けて來た生活への未練で一杯になつてゐることも承知してゐる。實際こゝで忽然生れ更つて謙遜な父の僕になれる程、お前の生活は熟してはゐないのだ。併し我々の内の誰がそのやうな光榮に充ちた成熟を恵まれてゐるだらう。私の眼の届く限りでは、我々の同胞は皆まだ花である。花の落ちたばかりの小さい青い木の實である。お前ばかりが幼稚なのではない。お前の道連れは多いのだ。お前の心が迷ひに充ちてゐるからと云つて、お前だけを責めようとは思はない。

併し、まだソワ／＼したお前の心持をジツクリと落ちつけて、同じ悩みに悩んでゐる私の言葉を聞いてくれ。私はたゞ感傷的に涙を流すのではない。かうしてまたしみ／＼お前に口を聞けるやうになつた事が、何故ともなく嬉しくて、感謝の心持で胸が一杯になつて來たのだ。悩みの多い兄弟よ、もつと話を進める前に、この烈しい風の音のなかで、靜かに靜かに祈らうではないか。

私はお前が大きい愛情を求めてゐる人間である事を昔から知つてゐた。その愛情の充たされない不安な焦燥が、お前のなかのドン・ホアンを嗾かけて、お前をまる

で餓えた犬のやうに女の肌から肌へと嗅ぎ廻らせた事も知つてゐる。今お前が自分の過去を悔いながらなほその過去に引かれてゐる機會を捕へて、私は自分の感じてゐたことをすつかり云つて了はうと思ふ。私の言葉はお前の急所を刺すことになるかも知れない。しかしそれはお前を殺すためではなくお前を活かすためなのだ。私の愛を疑つてはいけない。

私はお前にハッキリと云ふ、お前の放蕩が内的必然であるならば、思ひ切つて極端に放蕩することは、それだけ離して云へば、ちつとも悪くはない。お前はそれによつてお前の内の一つの有力な性質をよく生かすことが出来るのだ。お前はかなり烈しい Sensualist である事を自證した。さうして Sensualist のみが高い人間になれることを、多くの聖者藝術家思想家が證明してゐる。お前がもつと猛烈になりたいと思ふのは、この意味から云つて不都合ではないと思ふ。

併しお前は放蕩に耽り出す前にまるで違つた生活の中心を持つてゐた事を忘れて

はならない。それは永遠を戀ふる心である。大いなる愛に生きようとする努力である。お前は蕩兒となると共にこの内心の要求をどうしたか。——お前はそれを萎靡させた。それを誤魔化した。それを麻痺させた。

お前の精神全體は、生活全體は、この時から不具になり無秩序になつた。

もしお前が Sensualist として一步を進めると共に、更に求道者として一步を進め得る程強かつたならば、そこに意久地ない蕩兒の代りに、いのちに充ちたファウストが出来上つたらう。

なに？「私は愛を求めて放蕩した」？ そんな生温い辯解はしない方がいい。成程女を求めるのは、完全な自己の半身となる女を求めるのは、男性の必然性だ。そのためこそ個々の女に失望した男は、多くの女を通じて女性そのものを求めるのだ。それが生活原理としてのドン・ホアニズムだ。併しそこにはたゞ利己主義があつて眞の愛はない。それが人性の自然である理由を以て、他のあらゆる人性の自然

を殺す者は、不具な實驗の生活しか出来まい。もし彼の内になほ健全な生の本能が生きてゐるならば、彼は遂に烈しい空虚と絶望に陥らないではゐられないだらう。さうでなく晏然と何時までも放蕩する奴は、實はもう生きてはゐないのだ。精神がないのだ。生きた骸になり切つたのだ。

勿論私はお前が絶えず情愛を求めてゐたことを否定するのではない。唯それが女に可愛がられたい——云ひ換へれば女の愛を利用して自分の利己主義（情欲）を満足させようといふ心に過ぎなかつたと主張するのだ。お前は情愛を求める。併し自分の方から情愛を投げかけない。お前は母が子供を愛するやうに女が自分を愛することを要求する。併し父が子供を愛するやうに女を愛してやらうとはしない。つまり真に能動的に「人間を愛する心」がないのだ。

こゝにお前の恐るべき弱點がある。其ためにお前は愛のない享樂にのみ走つたのだ。お前の戀は肉の美しさなつかしさへの執著であつて、女の魂を勞はり活かし自分の内に融かし込まうとする熱愛ではなかつた。お前は女の内にも人格を見ようとはしない。女の人格を蹂み躪ることも恐れぬ。そのくせ女から献身と同情と勞撫とに充ちた愛を要求する。即ちお前は自分が愛するものとしては女が美しいニムフである事を望み、自分を愛して呉れるものとしては女がマリアであることを望むのだ。

私は繰り返してお前の注意を喚起する。お前はこれ迄永い間「人間を愛すること」を忘れてゐた。さうしてそこにお前の放蕩生活の核心があつた。トルストイも云つてゐるやうに、放蕩の要點は肉體的の亂暴にあるのではない、本當に放蕩の名に價する事實は、肉體上の交りを結んだ女と一切の道德的關係に立つことを避ける所に成立するのだ。即ち女を「人間」として取扱はない自分の行爲を自分で是認する所にあるのだ。お前はたゞ外形的な種々の行爲を特徴として放蕩生活を考へてゐるやうだが、それはまだ真に放蕩の暗い底を見得ないからだと思ふ。幾人の女に關

係しようとも、いかに女に甘くならうとも、それだけでは必ずしも放蕩とは云へない。

お前は自分の放蕩をまだ／＼やり方が足りないと思つてゐる。併しお前のやつて来た行爲をたゞ外形的にのみ考へて見れば、トルストイやストリンダベルグには決して負けないのだ。お前の足りないのは放蕩の外的經驗ではなくて、放蕩に際しての内的經驗だ。お前は自分の生活を深く掘り下げるといふ事の意味をまだ理解してゐない。生活の豊富は内界の豊富であることを、對象の豊富は對象を見る眼の豊富であることを、お前はまだ解してゐない。「如何に經驗したかゝ重大だ」などとお前の云ふのは、まだ／＼口眞似に過ぎないのだ。それが本當に解つたら、恐らくお前は慚愧のためにその言葉を口へ出す事が出来なくなるだらう。

お前は悔恨を感じてゐる。併しそれはまだお前の全心を浸さない。お前は自分の「人間が悪い」と云ふ。併しこの言葉の恐ろしさには打たれてゐない。お前の口振

りには何處かまだ空々しい「口先の甘さ」が匂つてゐるのだ。自分の苦しみを逃げたがる氣の弱い兄弟よ。あらゆる殻を脱ぎ捨て、直ちに自分の心臓から物を云へ。さうして自分の苦しみの奥底をまともに、たじろがずに見つめろ。自分の悪さを眞に悔いる者は自分で自分を地獄の火に焼かないではゐられないのだ。お前は自分で罵る事によつて手軽く宥免を期待してはゐないか。自分の生の暗さからあまりに早く眼をそむけたがりはしないか。お前の生活のどん底は外的の境遇に従つてこれから先に現はれるものではなく、自分の心を見るお前の眼が開けると共に、現在の生活の内に認められて來るのだ。お前の自覺が出なければ、たとへ乞食にならうと人殺しにならうと、どん底へ來た氣持にはなれないのだ。墮落、惡、腐敗――これらの事の深さは唯それを感じる心の深さに従つてのみ生ずる。お前はまだどん底へ落ちてゐないなどと考へてはいけない。自分の「人間が悪い」といふ事を本當に了解しろ。それが自分の生活を掘り下げる所以だ。そこにどん底があるのだ。

さうしてまた本當の光明があるのだ。

偉れた藝術家の作品に描かれた「人間の悪さ」を、いかに感動して讀まうとも、それはお前の美的受用であつて、直ちにお前自身の道義的生活ではない。美的受用の際に高められた精神が、眞に自己の内に根を張るには、能動的な峻嚴な自己活動が必要なのだ。お前の生活にはこの能動性が足りない。お前は美的受用の興奮に満足する傾きがある。

またお前は偉れた藝術品を作るために悪い事をする必要があると考へてゐるやうだ。併しさういふつもりでした事が本當にお前の體驗になると考へてゐては、到底救はれないだらう。外形的に云へばどんな經驗だつて出来るかも知れない。併しその經驗の眞の意味は結局解らないだらう。例へば女をよく描くためにお前がもつともつと色道修行をやるとする。その時お前の大きい愛はどうなるのだ。その結果はお前の過去が示してゐる。もしお前が覺めかけた本心を押し殺してその代り潤澤の

金を握つたなら、恐らく種々な女の心と體を汚したあとで、悟りすましたやうな顔附をして茶の湯にでも凝る事になるだらう。

——私はお前の上に種々な非難と警語とを積み重ねた。併し私はその故にお前が私の愛を感じて呉れると信じてゐる。あゝお前はまた唇のほとりに軽い冷笑を浮かべる。……それはお前の心臓から出た表情ではあるまい。もう此際になつて自ら欺いた所で何になるのだ。心弱き兄弟よ。

ともあれ私はお前の前途を祝福する。強くなれ、強くなれ、愛に於て強くなれ。徒らに偶像を頼るな。精神の薄弱な者が小さい奇蹟の催眠術に掛つて借着的信仰を獲得するやうに、或は運命の不思議と御利益とを結びつけて盲目的な狂信者になるやうに、意久地なく軽々しく他力に縋るのは、傍から見てもハラ／＼する。一つの靈異を見まもるのはいい、事だが、併し人性の大きい流れからは目を離すな。ロシアの僧院生活を最もよく活かし最も深く人性に交渉させたのは、僧侶でなくてドスト

イエフスキイであつた。靈異を行ふ人が無數に輩出する近代の世界文化に於て、最も力強く神の力を示現したものは、それら宗教の開祖ではなくて、寧ろドストイェフスキイ、トルストイ、ストリンドベルグその他の偉大な藝術家であつた。お前も亦彼らの如く自分の足でこの流に踏み込むことを忘れてはいけない。催眠術によつて不安と焦燥とを取り除かれた所でそれが何になるのだ。不安を除いて貰はうとするな。自分から不安を乗り超え打ち克つことによつて、大きい自由の境地に出ることを心掛ろ。さうしてその足跡を人性の内に永遠に残して呉れ。お前がその偶像から偉大な「日本の基督」を作り出し得たら、人類はどんなに喜ぶだらう。

迷ひ易き兄弟よ。眞に愛ある人になれ。自己を善きものに鍛錬せよ。標的を持つことが、即ち努力することが、生活そのものであることを悟つてくれ。製作するよりも「人」になるのが大事だ。もしお前が本來藝術家であるならば、たとへ「人」になる努力ばかりをしてゐても、結局否應なしにお前の仕事が藝術となつて現はれ

る。藝術家になるならないは素質の問題だ。「人」になるならないは生活そのものの問題だ。先づ「人」になるために、善き人になるために、自分の手から鐵槌を放すな。(時間的にこれを先にしろといふのではない。この方をより intense にしろと云ふのだ。)

私は無遠慮に云ひたい事を云つた。それはお前を愛する父の言葉の受賣りだからだ。併し私も亦お前の弱い迷ひ易い道連れだ。お互に愛し合ひ扶け合はうではないか。

五 情欲と淨化の要求と

偉大な藝術家で情欲と淨化の要求との葛藤をその製作の主題としないものはない。その解決を人間性質の大きい調和に求めるにしても、或は情欲の克服に求めるにしても、とに角彼らは烈しい内的苦闘を経験しなければならなかつた。彼らの偉大さはその苦闘の深さに比例してゐるやうである。

もとよりこれと趣の違ふ流行作家もある。安價な功利主義唯物主義の隆盛な時代に、それは何の不思議でもない。併しそれらは總て呪ふべき事である。人生のためにも、また眞正な藝術家のためにも。

ドン・ホアンと聖者との對立。これは永遠に人性の問題として残るだらう。さうして自分の内にこの對立を意識する人のある限り、十九世紀は盡きざる興味を以て

人生に迫るだらう。二十世紀の幕を開いたロマン・ロオランがトルストイの弟子であることは著しく我らの興味を引く。北歐の嚴肅な、同時に愛に充ちた精神は、爛熟し弛緩した南歐の文化を克服しないでは措くまい。我らの世紀はゲエテを再現するか。併しそれはストリンドベルグの後のゲエテでなければならぬ。

この事に就て私は私の眼を開いてくれたキエルケゴオルに感謝する。

六 幼稚と云ふこと

幼稚といふ言葉は普通價値の低小を意味して用ひられてゐる。併し「幼稚であること」それ自身は果して悪いか。

人は一躍して老熟するわけには行かない。従つて少年は少年らしい幼稚さを、青年は青年らしい幼稚さを、脱がれ得ぬものである。それは自然であつて、些かも嘲ふべきことではない。併しこの自然の幼稚さが少年らしい或は青年らしい猛烈な成長を示唆して居ない限り、それはいのちの停滞として見る者を不愉快にする。この場合の幼稚は恥づべきものである。「幼稚であること」が悪いためではなく、成長すべきものが成長して行かないために。

人はまた成長の速度の速いものに比べて遅いものを幼稚と呼ぶ。これは穩當でない。人がその性質に従つて歩度を異にするのは、極めて自然だからである。遅い者もその力強い歩調を生涯續けて行けば、遂にその標的に達し得るだらう。速い者は幾何も駈けない内に疲れて動けなくなる危険がある。精神的勞作を職とする日本人の内には後者に屬するものが頗る多い。我々は寧ろ、歩度の遅かるべき性質を有するものが強ひて速く駈けようとする所に、著しい幼稚さの現はれることを注意しなければならぬ。こゝでも悪いのはその幼稚さではなくて、自分に許されない無理をすることである。

併し幼稚として嘲けられる最も悪いことは他にある。それは自分の幼稚さを知らないことである。特にその結果として自分を實際「ある」以上に考へまた振舞ふことである。(これも亦無知と盲目とから出る態度が悪いのであつて、幼稚そのものが悪いのではない。)

自分の幼稚さを知らない者は屢々他の優越を看過して自分をその優れたものの上

に置かうとする。これによつて彼自身の價値は低くはならない。併し彼の成長は著しく害せられるだらう。

例へば自欺によつて自分の價値を過信したものは、自分の眞の位置を知らない。彼は或事を發見して人類に新しい寶を興へる様な氣持になる、——併しその事は更に優れた深い形で既に人類の寶になつてゐるのである。彼がその事を自分の道の上で發見したのは、事に相違ないが、併し彼はそれを以て自己の獨創と優越を誇る代りに、人性の大きい流れの深さに驚異し、自己の在來の幼稚を恥づべき筈であつた。この自覺によつて彼は自己の位置を知り、誇りの代りに苦しみを得、更に突き進むべく追ひ立てられるのである。しかも彼れにはこの事がない。従つて彼の幼稚は何時までも乗り越越されないのである。

自分の幼稚さを知らない者はまた自分の長所に眩惑して、何處に自分の研くべき所があるかを見ようとしなない。たとへ時に不安を感じても、自分の長所の故に自分を慰め、強ひて自分を安心させる。

例へば自分の内生の優越を信じて、自分の藝術家的な性質（形、様式、リズム、調和などに對する敏感）の幼稚に氣附かないものがある。たとへ彼の内生の優越を彼の信する通りに許すとしても、彼の作品が彼の信する如く價値高きものである事に同意する事は出来ない。藝術はその手段に制約せられる。手段の拙劣は現はすべきものを充分に現はし得なかつた事の表示である。如何に優れた内生を現はさうとしてゐても、それが現はれてゐない以上、その藝術は無價値である。彼がその幼稚さの何處にあるかを知らない内は、彼の成長を期待するわけに行かない。

また自分の藝術家的性質の優越の故に、敢て自分の幼稚さを見まいとするものがある。彼はその現はさうとする所のものを巧妙に現はし得る。併し彼はその巧妙に自足して、その現はさうとするものがあまりに小さくあまりに少ない事には心を配らない。彼は益々巧妙な奇警な藝術を作り得るだらう。併し遂に大きい高い藝術は、

彼からは産れまい。私はこの意味の幼稚な藝術家が日本の土に最も適してゐるのではないかを疑ふ。特に「江戸」はその意味で最も豊沃な地であつた。藝術の分野に就て云へば、日本畫家に最もそれが多い。併し小説家にも少なくはない。私は若々しい大望と溢れるやうな情熱の持主である筈の青年たちが、たゞ巧妙と奇警とを覗つて、骨の乾いた冷たい老人にふさはしい手さきの器用さを見せようと努めてゐるのを見ると、何とも云へず慘ましい氣持がする。彼らにはその幼稚を自覺するのは苦痛かも知れない。此儘で進んで行くのが一番いゝ道だと抗辯したいかも知れない。併し私は彼らの天分の豊かさを思へば思ふほど、彼らがつと本當に苦勞しようとしないうのを、残念に思ふ。

幼稚を脱する第一の道は幼稚を自覺することである。それは人を不安にし苦しめる。併し彼の本能が頽廢してゐない限り、彼を成長させないでは措かない。

自分の幼稚を自覺するには、偉大なものが何故偉大であるかを出来るだけ深く、

自分の心臓によつて理解しようと努めるのが、最善の方法である。

七 或思想家の手紙

—

秋の雨がしとくと松林の上に降り注いでゐます。折々赤松の梢を揺り動かして行く風が消えるやうに通り返りすぎたあとには、——また田畑の色が豊かに黄ばんで来たのを有頂天になつて喜んでゐるらしいおしやべりな雀が羽音を揃へて屋根や軒から飛び去つて行つたあとには、たゞ心に沁み入るやうな静けさが残ります。葉を打つ雨の單純な響にも、心を捉へて放さないやうな無限に深い或力が感じられるのです。

私はガラス越しにじつと窓の外を眺めてゐました。さうしていつまでも身動きをしませんでした。私の眼には涙がにじみ出て來ました。湯加減のいゝ湯に全身を浸

してゐるやうな具合に、私の心は或大きい暖かい力にしみとくと浸つてゐました。

私はたゞ無條件に、生きてゐる事を感謝しました。總ての人をかういふ融け合つた心持で抱きたい、抱かなければすまない、と思ひました。私は自分に近い人々を一人一人全身の愛で思ひ浮べ、その幸福を眞底から祈り、さうしてその幸福のためにありたけの力を盡さうと誓ひました。やがて私の心はだん／＼擴がつて行つて、まだ見たことも聞いたこともない種々の人々の苦しみや涙や歡びやなどを想像し、その人々の爲めに大きい愛を祈りました。殊に血なまぐさい戰場に倒れて死に面して苦しんでゐる人の姿を思ひ浮べると、私はじつとしてゐられない氣がしました。

私は心臓が變調を來たしたやうな心持でとりとめもなくいろ／＼な事を思ひ續けました。——併しこれだけなら別にあなたに訴へる必要はないのです。あなたに聞いて頂かなければならない事は、その後一時間ばかりして起りました。それは何でもない小さい出來事です、併し私の心を打ち砕くには十分でした。

私は妻と子と三人で食卓を圍んでゐました。私の心には前の續きでなほさまゝの姿や考が流れてゐました。で、自分では氣が付きませんでした。私はいつも考に耽る時のやうに人を寄せつけないムツかしい顔をしてゐたのです。私がさういふ顔をしてゐる時には妻は決して笑つたりハシヤイだりは出來ないので、自然無口になつて、いくらか私の氣ムツかしい表情に感染します。親達の顔に現はれたかういふ氣持は直ぐ子供に影響しました。初めおとなしく食事を取つてゐた子供は、何故とも解らない不満足のために、だん／＼不機嫌になつて、たうとうツマラない事を云ひ立て、愚圖り出しました。かういふ事になると子供は露骨に意地を張り通します。勿論私は子供の我儘を何でも押へようとは思ひませんが、併し時々は自分の我のどうしても通らない障壁を経験させてやらなければ、子供の「意志」の成長のためによろしくないと考へてゐます。で此時にも私は子供を叱つてその我儘を押し潰さうとしました。——何時の間にか私は子供の我儘に對して自分の意地を通さうと

してゐました。私は涙ぐみながら子供の泣くのを叱つてゐました。おしまひには私も子供と一緒に大聲を擧げて泣きたくなりました。——何といふ馬鹿な無慈悲な父親でせう。子供の不機嫌は自分が原因をなしてゐたのです。子供の正直な心は無心に父親の態度を非難してゐたのです。大きい愛に就て考へてゐた父親は、この小さい透明な心をさへも暖めてやることが出來ませんでした。

私は自分を呪ひました。食事の時ぐらゐは何故他の者と一緒の氣持にならなかつたのでせう。何故子供に對してまで「自分の内に閉ぢ籠ること」を續けたのでせう。私が總ての人を愛で以て抱きたいと思つたことは本當です。それに關係していろいろ「いゝ事」を考へ續けてゐたことも本當です。併し直ぐその場で自分に最も近い者をさへも充分愛してやれないくせに、そんな事を考へ續けたつて何になるでせう。しかもそれが、その運命に對しては無限の責任と恐ろしさを感じてゐる自分の子供なのです。不斷に涙を以て接吻しつゞけても愛し足りない自分の子供なのです。

極度に敬虔なるべき者に對して私は極度に輕率に振舞ひました。羞かしいどころではありません。

私は此事によつて自分のもつと重大な色々な缺點を示唆されたやうに思ひました。

二

私は自分のイゴイズムと戦つてゐます。イゴイズムその者は絶滅は望まれないまでも、イゴイズムをして絶対に私の愛を濁さしめないことは、私の日常の理想であり又私の不斷の鞭です。この志向だけに就て云へば別に問題はありません。これが眞の自己を生かせる道ですから。

併し私は自己を育てようとする努力に際して、この努力その者がイゴイズムと同じく愛を傷ふことのあるのを知りました。私は仕事に力を集中する時愛する者たちを顧みない事があります。私を愛してくれる者は勿論それを承知してその集中を妨げないやうに、若くはそれを強めるやうに、力を添へてくれます。併し自分を犠牲

278764

にしてまでそれに盡してくれる者はたゞ一人きりです。他の者たちは、私からされる様に望んでゐる事を私が果さない場合に、やはり私を不満足に思ひます。さうしてそれがその人たちのツマラない我儘から出てゐる場合でも、私を怨み憤ります。私は彼等の眼に冷淡な薄情な男として映るのです。

殊に私は時々何かの問題のためにひどい憂愁に閉ぢ込められる事があります。私はいくらあせつてもこの問題を逃避しない限り或「時」が来るまでは自分をどうすることも出来ないのです。私もまさかこのジメ／＼した氣分を側の者に振りかけなければゐられない程弱くはありません。併し人の前でそれを少しも顔に出さないでゐられる程強くありません。私は暗い沈んだ顔をして黙り込んでゐます。さうしてこの表情のために愛するものたちを不幸にします。かういふ時に私は彼らを勞はつてやることも、彼らを喜ばせる事も、彼らと共に喜ぶことも出来ないのです。私の心は石のやうに固まつて、たゞ温められ融かされる事を望むばかりです。私にと

つては一つの憂愁を切り抜ける事はいくらかの成長になります。併しそのために私は或時の間冷たい人間になつてゐます。

實際私たちのやうな仕事を選んだ者は、或一つの輝いた瞬間を捕へるために、果實のない無駄な永い時間を費やすことがあります。さういふ時に人が、そんなにノラクラしてゐる位なら、と思ふのも無理はないと思ひます。自分でさへさう感じる事が時にはあるのですから。私は私たちの心持に同情のない要求に直ぐ従はうとは思ひませんが、併しなほ自分をどうかしななければならぬ事を切に感じます。日常の生活は實に貴いのです。言譯が立つからと云つて、なすべき事をしないのは矢張りいゝ事ではありません。たとへ仕事に全精力を集中する時でも「人」として振舞ふことを忘れてはならない。それが出来ないのは弱いからです。愛が足りないからです。

私は自分の仕事のために愛する者の生活をいくらかでも犠牲にすることを恥ぢません。この犠牲を甘んじて受けるのは、取りもなほさず、自分の弱さを是認するのです。私は弱さに安んじたくありません。自分の弱さのために他の運命を傷け犠牲にするなどは、あまりに恐ろしい。

三

また私は人を責めることの恐ろしさをもしみくと感じました。私は或思想に據つて行爲を非難する事があります。さうして時には自分の行爲も亦同じ様に非難せられなければならない事を忘れてゐます。

或時私は友人と話してゐる内に、だん／＼他の人の悪口を云ひ出した事がありました。対象になつたのは道徳的の無知無反省と教養の缺乏とのために、自分のしてゐる恐ろしい悪事に氣附かない人でした。彼は自分の手で或人間を腐敗させて置きながら、自分の罪の結果をその人のせゐにして、たゞその人のみを責めました。彼は物的價値以外を知らないために總てを此價値によつて律しようとし、最も嚴肅な

生の問題をさへもさういふ心情の方へ押しつけて行きました。さういふ罪過はいろいろな形で彼に報いに來ましたが併し彼はその苦惱の眞の原因を悟る事が出來ないのでした。私はその人の人格に同感すればするほど不愉快を感じます。さうしてその苦惱に同情するよりもその無知と卑劣が腹立たしくなります。——で私は友人と二人でヒドイ言葉を使つて彼を罵りました。私の妻は初めから黙つて側で編物をしてゐました。やがて（いつも悪口をいふ時にさうであるやうに）私はだん／＼心の空虚を感じて來て、ふと妻の方に眼をやりました。妻も眼を上げて黙つて私を見ました。その眼の内には一撃に私を打碎き私を恥ぢさせる或物がありました、——私の缺點を最も好く知つてしかも私を自分以上に愛してゐる彼女の眼には。

私は直ぐ口を噤みました。後悔がひどく心を噛み始めました。人を裁くものは自分も裁かれなければならない。私はあの人を少しでもよくしなければならぬ立場にありながら、あの人に對する自分の悪感のみを表はしたのです。私の悪感は何を

益、悪くしようとも、善くする筈はありません。既にこれ迄にも彼を壓迫する事によつて彼の自暴自棄を手傳つたのは、私であつたかも知れません。私も亦彼の頽廢に就て責を負ふべき位置にあるのです。殊に私は（物的價値に重きを置かないと信じてゐる私は）彼のためにどれだけ物的の犠牲を拂つてやりましたか。物的價値に執する彼の態度への悪感から私は寧ろさういふ盡力を避けてゐました。さうしてこの私の冷淡は彼の態度を益々淺ましくしました。こゝでも亦私は責を脱れる事が出來ないので。畢竟私の非難が私自身に返つて來ます。

私は自分の思想感情が如何に浮ついてゐるかを知りました。私が立派な言葉を口にするなどは實におほけない業です。罵つても罵つても罵り足りないのは矢張り自分の事でした。

四

私は道德をたゞ内面的の意義に就てのみ見ようとして居ます。さうして他人の不

道徳を罵る時にはその内面的の穢なさを指摘しようとしています。

併し自分の心はどれほど清らかになつてゐるか。恥づべき行爲をしないと自信してゐる私は、心の中ではなほあらゆる悪事を行つてゐるのです。最も狂暴なタイラントや最も放恣な遊蕩兒のしさうなことまでも。勿論私は氣附くと共にそれを恥ぢ自分を責めます。併し一度心に起つた事はいかに恥ぢようとも全然消え去るといふ事はありません。時には私は自分の心が穢いもので一杯になつてゐる事を感じます。私たちはこの穢いものを恥ぢる故に、抑壓し征服し得る故に、安んじてゐていゝものでせうか。私は自分に親しい者たちの心の内に同じ様な穢ないものがある事を想像するのはとても堪らない。それと同じく他の人も私の心の暗い影を想像するのは非常に不愉快だらうと思ひます。私はどうしても心を清淨にしたい。たとへそのために人間性質の或點に關する興味が涸渴しようとも。私が他人を罵るのは畢竟自分を罵ることでした。他人の内に穢ないもののある事を見出すのは、要するに自分の内にも同じもののある證據に過ぎませんでした。

五

あまりジメ／＼した事ばかりを書いてすみません。併しあなたに訴へれば私の胸はいくらか軽くなるのです。

私たちが今矮小だといふ事實は、實際私たちを苦しくさせます。けれども苦しいからと云つてこの事實を認めないわけには行きません。私よりも聰明な人は私よりもつとよくこの事實を呑み込んでゐると思ひます。自分の小ささを知らない青年はとても大きく成長する事は出来ずまい。

併しこの事實の認識はたゞ「愚痴」といふ形にのみ現はるべきものでないと思ひます。愚痴をこぼすのは相手から力と愛を求めることです。相手にそれだけ力と愛とが横溢してゐない時には、勢ひ愚痴は相手を弱め陰氣にします。我々から愛を求めてゐる者に對して我々の愚痴を聞かせるのはあまりに心なき業だと思ひます。

私たちは未來を知らない。未來に希望をかける事が不都合なら未來に失望する事も同じやうに不都合です。併し私たちは唯一つ、生が開展である事を知つてゐます。私たちはたゞ未來を信じて、現在に努力すればいゝのです。努力のための勇氣と快活とを奮ひ起せばいゝのです。現在の小ささを悟れば悟るほど努力の熱は高まつて來ます。自分の運命を信じて、今に見ろ今に見ろと云ひながら努力する事は、自分に對していゝのみならず、自分の愛する人々を力づけ幸福にする意味で、他人のためにもいゝ事です。何處まで行けるかなどといふ事はこの場合問題ではありません。たゞ私はこの運命の信仰が現在の無力の自覺から生れてゐる事を忘れたくないと思ひます。こゝに誇大妄想と眞實の自己運命の信仰との別があるのです。成長しないものと不斷に力強く成長するものとの別があるのです。前者は自己を誇示して他人の前に優越を誇ります。後者は自己を鼓舞し激勵すると共に、多くの悩み疲れた同胞を鼓舞し激勵します。

あなたに愚痴をこぼしたあとでこんな事をいふのは少しおかしいかも知れません。併し私はあなたに愚痴をこぼしてゐる内に自然かういふ事を云ひたい氣持になつて來たのです。

六

私はどんなに自分に失望してゐる時でも、やはり心の底の底で自分を信じてゐるやうです。眼が鈍い、頭が悪い、心臓が狭い、腕がカジカンである、——どの性質にも才能にも優れたものはない、——しかも私は何事をか人類の爲めになし得る事を深く固く信じてゐます。もう二十年！ さう思ふとぐツたりしてゐた體に力が漲つて來る事もあります。

運命と自己。此問題は久しく私を悩ませました。今でもよく解りません。併しこれまで經て來た自分の道を振り返つて見ると、重大な事は總て豫期を絶してゐました。これから起る事も恐らく豫期をはづれた事が多いでせう。私はいろ／＼な事を

考へたあとでいつも「明日の事を思ひ煩ふな」といふ聖語を思ひ出し、總てを委せてしまふ氣になります。さうしてどんな事が起らうとも勇ましく堪へようと決心します。

併し私は既に與へられたものに對しては吞氣である事が出来ません。運命が自分をいかに變化しようとも自分が他人になる事は決してありません。私の個性は性格は私の宿命です。どういふ樹になるかは知らないが、芽は既に出てゐるのです、伸びつゝあるのです。芽の内に花や實の想像はつかないとしても、その花や實が既に今準備されつゝある事は確かです。今はたゞ出来るだけ根を張り出来るだけ多く養分を吸ひ取る事の他になすべき事はないのです。いよ／＼果實が熟した時それがいゝ味を持つてゐなくても、私は精一杯いゝ實をならさうと努めたことで満足しようと思ひます。

とは云へ自分の才能のことは繰返し繰返し問題になります。さうして才能を重大視するなといふ色々の人の言葉が、私の底冷のしてゐる心に温かい慰めを與へてくれます。天才は勉強だ、彼等の才能はさほど特殊なものではない、(ニイチエ)の様な人ですら三十四の年にかう云ひました。才能少なくて偉大な人間になつた人はあらゆる方面にある、彼等はたゞ誤魔化しをしない、堅實な、辛抱強い Handwerker-Ernst があつたのだ。——かういふ言葉が私に力をつけてくれます。まことに英雄的生活が試練と惱苦と精力と勤勞とに於て主に偉大であつたことは、私たちの勇氣を鼓舞し私たちをふるひ立たせます。憐れなる惱める者も誠實な勇氣と努力とを以てすれば遂には何者かになり得るのです。偉大な人々の悲劇的生活は私たちの慰藉でありまた鞭であります。彼等が小さい一冊の本を書くためにも、その心血を絞り永年の刻苦と奮闘とを通り抜けなければならなかつた事を思へば、私たちが生温い心で少しも早く何事かを仕上げようなどと考へるのは、あまりに吞氣で薄ッぺらすぎます。

私は才能乏しくしてしかも善良なる人が、宿命として自分に押しつけられてゐる自分の性質を、呪ひ苦しんでゐるのに出逢ふ毎に、わけもなく涙ぐましい心持になります。殊に彼が沈黙と憂愁との内に靜かに首垂れてゐるのを見ると、じつとしてゐられないやうな、飛びついて抱いてやりたいやうな心持になります。一つには身にツマされるせゐもあるでせう。併しこの悲哀は人類の悲哀です。この悲哀にしみじみと心を浸して、共に泣き互に勵まし合ふのは、私にとつては最も人間的な氣のする事です。私はかういふ人に對して如何なる場合にも高慢である事は出来ません。特にその才能の乏しいのを嘲ふやうな態度は、恐ろしい冷酷として、寧ろ憎むべき事に思ひます。才能の乏しいのは確かにいゝ事ではないでせう。併し才能が人間の總てではありません。才能の乏しい者にも愛すべき者があり才能の豊かな者にも卑しむべき者があります。才能を重んずる現代の社會から、特に才能に富んだ人を集

めた特殊の場所からは、あまり偉大な人が生れて來ないといふ事實は、いかにも反語らしく私たちの心に響きます。私は才能を誇りながら遂に何の仕事をも成し遂げない高慢な人よりも、才能の乏しい謙遜な人の方を遙かに愛しなつかしみます。

けれども私は、同じく自分の凡庸を意識してゐても、それを誤魔化さうとか、つてゐる人に同情する事は出来ません。彼等は何等かの點で自分を是認し安心しようとするのです。私はかういふ人の前に出ると、ひどい腐敗の臭氣を感じます。さうして、悲しむべき事を悲しまず、偉大な者に跪かず、畢竟人類の努力に對して没交渉であらうとする彼等の態度に、抑へ難き憤怒を感じます。しかもこの様な人が如何に多いこととせう。彼等の前には偉大な藝術も思想も味なき鹽と異ならないのです。彼等は、全體、人生が偉大である必要を認めないので。

私は正直に惱む人に對しては同胞らしい愛を感じます。現世の濁つた空氣の中に何の不満もなささうに榮えてゐる凡庸人に對しては、烈しい憎惡を感じます。安價

な樂天主義は人生を毒する。魂の饑餓と欲求とは聖い光を下界に取り下さないでは息まない。人生の偉大と豊饒とは畢竟心貧しき者の上に恵まれるでせう。惱める者貧しき者は福なるかな。私は自分の貧しさに嘆く人々が一日も早く精神の王國の内に、偉大なる英雄たちの築いたあの王國の内に、限りなき命の泉を掬み、強い力と勇氣とを以てふるひ立つ日の來らんことを祈つてゐます。

八

もう夜が更けました。沈んだ心持で書き始めたこの手紙をとりとめもなく書きつづけて行く内に、私は興奮して五體に力の充ちたことを感ずるやうになりました。あなたは喜んで下さるでせう。あなたに讀んで頂くずつと前に、あなたに手紙を書いたといふ事だけで私にはもう效能があつたのです。私は此手紙に論理的連絡の缺けてゐる事を知つてゐます。併しそれはかまひません。私はもう此手紙を書き初めた時の目的を達しました。

空が物凄く晴れて月が鋭く輝いてゐます。蟲の音は弱々しく寂れて來ました。私は今あなたと二人で話に夜を更かした時のやうな心持になつてゐます。では安らかにやすみなさい。

八 停車場で感じたこと

或雨の降る日私は友人を郊外の家に訪ねて晝前から夜まで話し込んだ。遅くなつたのでもう歸らうと思ひながら、新しく出た話に引張られてつひ立つことを忘れてゐた。ふと氣附いて時計を見ると、自分が乗ることにきめてゐた新橋發の汽車の時間が大分迫つてゐる。でいよ／＼別れることにして立ち上らうとした。その時また一寸とした話の行掛りでなほ十分程尻を落ち附けて話し込む様な事になつた。それでも玄關へ降りた時には、左程急がずに汽車に間に合ふつもりであつた。で玄關に立つたまゝ、それまで忘れてゐた用事の話と思ひ出して、暫く話し合つた。

電車の停車場の近くへ來ると、丁度自分の乗る筈の上り電車が出て行くのが見え
た。「運が悪いな、もう二三分早く出て來たら。」と思つた。待合へはいつてから何
氣なしに正面の大時計を見ると、何時の間には大變時間が経つてゐる。變だと思
つて自分の時計を出して見る。自分の十分ほど遅れてゐる。午前には確かに合つ
てゐたのだが二時頃止まつてゐたのを友人の家のと合はせた時に、遅れた時間と合
はせたわけなのだらう。これでは汽車の時間にカッ／＼だ、拙くすると乗り遅れる
かも知れない、あの時計が止まつてくれなければよかつた、などと思ふ。併し電
車は直ぐ來た。それがまた思つたよりも調子よく走る。人の乗降りがあまりないの
で停車場などは止まつたかと思ふと直ぐ出る。時計を出して見ると三分位で一丁場
走つてゐる。この分なら大抵大丈夫だと安心した氣持になる。

併し時間は一杯だつた。市街電車へ乗り換へる所へ來て、改札口で乗越賃を拂は
うとすると、釣錢がないと云つて驛夫が向ふへ取りに行く。釣錢などでグズ／＼し
てはゐられないのでその儘直ぐ駆け出したくなる。併しあとから驛夫が大聲を出し

て追駈けて來たりすると氣の毒だと思つて一寸躊躇する。その間に驛夫が釣錢を持つて來る。僅か一分程の間だったが、そのためイラ／＼させられたので、急いで泥道を駈け出した。見ると停留場に電車がとまつてゐる。好い具合だと思つて速力を増して駈ける。五六間手前まで行くと電車は動き初めた。しまつたと思ひながらなほ懸命に追駈けて行く。電車はだん／＼早くなる。それを見てとても乗れまいといふ氣がしたので、私はふと立留まつた。その瞬間にあれに乗らなければ遅れるかも知れないと思つた。それで直ぐまた全速力で飛び出せば無理にのれない事もなかつた。併しその時ほんの一秒か二秒の間躊躇した。さうしてア、電車が遠ざかつて行くと思ひながら、その後姿を眺めた。その僅かな間に電車がまた四五間も走つたので、追ひつける望はずつかり消えてしまつた。

振り向いて見ると、あとの電車は影も見えない。また時計を出して見る。矢張りあれに乗らなければ駄目だつたと思ふ。電車はまだつひそこに見えてゐるので、もう一度飛び出したくなる。口惜しくなつて足を踏みならす。齒ガミをする。拳に力がはいつて來るが、その遣り場がない。後を見るとまだ次の電車は見えない。また先の電車を見る。見まもつてゐる内に次の停留場で止まつてまた動き出す。やがて坂をおりてだん／＼見えなくなる。あれに乗つてゐればもうあんなに遠く行つてゐるのだ。これだけ距離の差があれば汽車に二つ位乗り遅れるには充分だなどと思ふ。

次の電車が遙か向ふに見えた。時計を見ると三分経つてゐる。早く來ればいゝと思ふがなか／＼やつて來ない。やつと前まで來る。乗る。時計を見る。もう五分経つてゐる。時計と睨めくらしてゐると電車が走るわりに時の經つのが遅いのでいくらか氣丈夫にもなるが、併し窓から外を見る毎にまだこんな所かと思ふ。それでもまだ全然間に合はないと思へないので、熱心に時計に注意してゐる。平生は十分も二十分もかゝると思つてゐる所を、電車は五分位で走つてしまふ。

とてもさう早くは行くまいと思つてゐた時間で、感心にも電車は土橋の停留場まで来た。時計を見ると汽車が丁度出る時刻である。併しプラットフォームには汽車の影が見えない。汽車だつて一分位遅れる事はあるし、自分の時計だつて一分位進んでゐないとは限らないなどと思ひながら停車場へはいつて行くと、その大時計は丁度汽車の時間よりも二分先へ出てゐて、驛夫が次の汽車の時間を改札口の上に掲示してゐる所であつた。

「あゝあと一時間と四十分だ。電車に乗る時の僅か一二秒のために、何といふへマだらう。否、その前に停車場を出る時釣銭を取らなければよかつたのだ。否もう一つ前に友人の家から出た時もつと早く歩けばよかつた。さう云へば友人の所をもう五分早く出れば問題はなかつた。併しこんな事を云つてもキリがない。とに角總てがまづかつた。「何か」が俺に悪戯をしやがつたのだ。」——こんな風に腹のなかで呟きながら私はヤケに土間を靴で踏みつけた。

やがて私は未練らしく頭の上の時刻表を見上げた。さうして「おや」と思つた。そこには次の汽車との間に今までなかつた筈の汽車の時間が掲げてあるのである。私はいくらか救はれたやうな感じであたりを見廻した。成程大きな掲示が出てゐる。その臨時汽車は直ぐ前日から運轉し始めたのだつた。「こいつは運がいゝ。」と私は思つた。併し時間を勘定して見て矢張り一時間許り待たなければならぬ事が解ると、私の心はまた元へ戻り始めた。「何だ、こんな事で埋め合はせをするのか、畜生め。」私は仕方なく三等待合室へはいつて行つた。見ると質朴な田舎者らしい老人夫婦や乳呑兒をかゝへた母親や四つ位の女の子などが、しよんぼり並んで腰を掛けてゐる。朝からその儘の姿でじつとしてゐたのではないかと思はせる位靜かに。その眼には確かに大都會の烈しさに對する恐怖がチラついてゐる。私は引きつけられてじつとその一群を見まもつた。さうして、遠くへ行く鈍い三等の夜汽車のなかの光景を思ひ浮べた。それは老人や母親にとつて全く一種の拷問である。併し彼ら

には貧乏であるといふ事の外に何にも白状すべきことがない。彼らは黙つて靜かにその苦しみに堪へる。寧ろ或遠隔な土地へ行くためにはその苦しみが當然であることを感じてゐる。たとへ眠られぬ眞夜中に、堅い腰掛の上で痛む肩や背や腰を自分でどうにも出来ないはかなさのため、幽かな力ない嘆息が彼らの口から洩れるにしても。

私はこんな空想に耽りながら、ぼんやり乳呑兒を見下ろしてゐる母親の姿を眺め、甘へるらしく自分に寄り掛つてくる女の子を何か小聲で云ひなだめてゐるらしい、老婆の姿を眺め、見るともなく正面を見つめてゐる老爺の悲しむ力をさへ失つたやうな顔を眺めた。私の心は急にしみじみとして和らいで來た。何といふ謙虚な人間の姿だらう。それに比べて私の心持は、何といふ空虚な反撥心にイラ立つてゐるのだ。恰も自分の上に降りかゝつた小さな出來事が何か大きい不正でもあるかのやうに。——あの人達を見ろ。靜かに運命の前に首を垂れてゐるあの人達を見ろ。あれが人間だ。

或暗示が私の胸に沁み入つた。私は何かを呪ふやうな氣持になつた先程の自分を恥ぢた。もしその何かが神だつたら！ 恐らく神と雖、もつとく比べものにならない程の苦しみを私の上に置く事もあるだらう。しかも恐らく私を愛する故に。不遜なる者よ。極めて小さい不運をさへも、首を垂れて受けることの出來ない心傲れる者よ。そんな淺い心にどうして運命の深いこゝろが感じ得られよう。

私は固い腰掛に身を沈めて、先程までの小さい出來事を思ひ返した。一々の瞬間にさうならなければならぬ或者がひそんでゐるやうにも思へた。總ての條件が最後の瞬間を導き出すやうに整然たる秩序の内に繼起したやうにも感じられた。さうして私は自分を鞭打つた。私は自分の運命を愛してゐるつもりでゐたが、併し私はまだ本當に約百の心を解してゐないのだ。運命に對するあの絶對の信仰と感謝の心を併せてまた「運命を愛せよ」といふあの金言の眞の深さと重さをも。

二

私はこの出来事が小さい家常茶飯の事である故を以て、その時の自分の心の態度を輕視する事は出来なかつた。寧ろそれが極めて單純にまた明白に、自分の運命に對する愛と反撥とを示してくれた故を以て、いくらかの感謝の内にこの經驗を迎へる事が出来た。さうしてこの單純な鏡に自分の生活のさまざまの相をうつして見た。例へば時間の代りに自分の努力を。汽車の代りに自分の仕事を。或は又、時間の代りに自分の生活全體を。汽車の代りに自分の永遠のいのちを。

さうして私はこゝにも自分の上に鍛鍊の鐵槌を下すべき必要を感じたのであつた。

三

私は思つた。私は自分の努力の不足を責める代りに、仕事がうまく行かなかつたことでイライラする。自分の生活の弛緩を責める代りに自分がより高くなならないこととでイライラする。さうして或惡魔の手を、——或は不運と不幸を呪はうとする。

何といふ輕率だらう。もしそれが自分から出た事ならば、私はたゞ首を垂れる外仕方がないではないか。私は自分の不足を憎んでも自分の運命を憎むべきでない。寧ろ自分の不足の故に自分を罰した運命に對して心から感謝すべきである。

私は未來を空想する。併し自分の現在が自分の未來をどう規定するかに就ては、實際は無知である。それはたゞ自分の智慧が臆測の光を投げ込みに過ぎない底知れぬ深淵である。併しその深淵の隅から隅まで行き互つてゐる或大いなる力と智慧との存在する事を、さうしてその力と智慧とが敏感な心を一瞬の光を投げることを否むわけに行かない。我々は不斷に我々の生活の上にかゝつてゐる運命に對してこの一瞬間のために、敬虔な疲れない眼を見はつてゐなくてはならぬ。一つの不幸も必ず何事かを暗示するに相違ない。それは呪はるべきものではなくて、愛せらるべきものである。

で私は思つた。いかなる運命もこれを正面から受けなくてはならない。さうして

それが自分に必然であつたことを愛によつて充分根本的に理解しなくてはならない。「かうなる筈ではなかつた」などと現在の或境遇に反撥心を抱くことは、現實の生に對する不眞面目であり、また現實からの逃避である。そこにはもはや自己の改造や成長の望はない。我々はたゞ現在の運命を如實に見きはめることによつて、(既に起つた事に對する謙虚な忍従によつて)多産なる未來の道をきり開く事が出来る。時には過去の改造さへ不可能ではない。

四

また私は「あの時あゝすれば間に合つたのに」と感じた自分の心理に就て考へた。「あの時」はもう過ぎ去つてゐる。さうして「あの時」には「あゝしなかつた。」それはもう變更の出來ない事實である。たとへ「あの時」私が、いづれの行爲をも自由に選び得たとしても、私の實行したのはたゞ一つであつた。この一つの外に事實はない。「あの時あゝすれば」といふ感じは、この事實が必然でなかつたと主張する

に外ならない。併し果してこの唯一の事實が必然でなかつたのか。外にも歩まるべき道があつたのか。私にはさう思へない。「事件の起る前には道はない、起つた時にはたゞ一つの道があるのみだ、」といふ言葉は、私には動かし難い眞實として響く。然らばこの必然性はどこから來るか。私は思ふ、我々の意志の關する限りに於ては恐らくそれは我々の性格から來るだらう。「性格は運命だ。」我々はこの運命を脱れることが出來ない。

「あの時あゝすればかうはならなかつた」といふ運命への反撥心は、要するに事實に於て(無意識的にはあるが)自己の性格に對する抗議である。しかもそれは無意識的なる故に、自己その者を責めることをせずして寧ろ漠然と或「不運」といふ如きものを呪ふ氣持になる。こゝに迷妄と怯懦とのひそむことを忘れてはならない。一つの不幸を眞に意義深く生かす所の力は、あく迄も自己自身に就ての微妙な、鋭敏な、厳格な認識と批評とである。事實の責任を他に嫁せずして自己に歸するこ

とである。我々は自己の運命を最もよく伸びさせるために、徒らに過去を口惜しがるやうな愚に陥らないで、執拗な眼光を自己の内に投げなければならぬ。

五

私の思索はまた「外から迫つて来るやうに感ぜられる運命」の上に移つた。さうしてイキナリ私の胸にこだはつてゐる「死」の問題と結びついた。

もし突然私の身の上に「死」が迫つて来た時、私はたゞ恐怖に慄へるばかりだろうか、或はこれを悪魔の業として呪ふだらうか、もしくは又神の攝理として感謝を以て受けるだらうか。

もし先刻の事件を以て推論することが許されるなら、私は恐らく恐怖と呪詛とで狂ひ立つばかりだらう。しようと思ふ仕事はまだ何一つ出来てゐない。昇らうと思ふ道はまだやつと昇り始めたばかりだ。今死んでは今まで生きたことがまるきり無意味になる。これはとても堪らない。——かう思つて私は「死」の來やうの早かつ

たことを呪ふだらう。更にまた自分の愛する者が自分の死によつて受ける烈しい打撃を思へば、彼らの生くる限り彼らにつきまといふ重い悲哀を思へば、死んでも死に切れないやうなイライラ／＼しさを感ずるだらう。

併し私は自分がもがき死することに堪へられるか。——とても、とても。私は心から静かな大きい死を望む。殉教者のやうに自信のある落ちついた死を。もし「死」といふ嚴肅な問題の前にさへも、今夜の出來事のやうに振舞ふとすれば、私は自分を何と云つて輕蔑していか解らない。——けれども果して私はその輕蔑に價する振舞をしないだらうか。それ程私の腹は死に對しても据つてゐるだらうか。私にはそれ程の自信があるのか。

今夜これから汽車にのる。その汽車に何か椿事が起つて私が重傷を負はないものでもない。もし私が擔ぎ込まれた病院で醫者に絶望されながら床の上に横はるとしたら、さうして夜明けまで持つかどうか危ないとしたら、私はどうするだらう。逢

ひたい人々にも恐らく逢へまい。整理して置きたい事も今更如何ともしようがない。自分の生涯や仕事に就て心残りの多いのは云ふまでもない事だ。それでも私は靜かに死ねるだらうか。黙つて運命に頭を下げる事が出来るだらうか。――

私はかうして自分を押しつめて見た。さうして自分にまるで死ぬつもりのないことを發見した。「今死んでは堪らない。併し多分自分は永生するだらう。」かう云ふ思が私から死に對する痛切な感じを奪つてゐる。恰かも「死」といふ運命が自分の上にはかゝつてゐないかのやうに。結局私は「死」に對して何の準備も覺悟も出來てゐない。「死」を本當に眞面目に考へることさへもしないらしい。

併し私がもう五十年生きることが確實なのか。私が明日にも肺病にかゝるかも知れない事は何故に確實でないのか。――私は未來を知らない、死の迫つて來る時期をも知らない。「きつと永生する」といふのはたゞ私の希望に過ぎないのだ。蟲のいゝ豫感に過ぎないのだ。それに何故私は「死」を自分に近いものとして感じないか――抑も感じたくないのか。

「人は總て死刑を宣告せられてゐる、たゞ死刑執行の日がきまらないだけだ」といふ言葉がある。これは *Man is mortal* を云ひ換へたに過ぎないが、併し特に私の胸を突く。さうだ、たゞ日がきまらないだけだ。死の宣告はもう下つてゐる。私たちは吞氣にしてゐられるわけのものではない。私たちは生きてゐる一日々々を感謝しなければならぬ。さうして充實した氣持で生を感受し生を築かなくてはならぬ。生きてゐる内に *immortal* な生を擱むために、さうして出来るならば「死」を凱旋であらしめるために。

私の心は何故ともなく奮ひ立つた。運命の前に靜かに頭を下げ得るためには、今ボンヤリしてはゐられない。たとへ死が（自分に尾行して來る死が）豫期よりも早く自分の前に現はれようとも、せめて現在に力の限りをつくしたと云ふ理由で、落ちついて運命に従ふことが出来るだらう。さうしてなすべき事をなした人間の權

利として永遠に人類の生命の内に生きる事も出来るだらう。

これが私の覺悟であつた。あきらめの心持で運命に従ひ得るためには、一日もボンヤリしてゐられないといふ事が。

「明日の苦勞」は私がしなくてもいい。私はたゞ「今日の苦勞」を力一杯に仕上げよう。それが最も謙遜に運命に従ふ道だ。

六

時間が迫つたので私は堅い腰掛から立ち上つた。さうして幾度も躊躇しながら、老人と母親の一群に近づいた。私は心ひそかな感謝と同情のために一つの小さい親切をしようと思つたのである。

先程私が考へ込んでゐた時に、雑役夫が掃除にはいつて來た。母親は彦根へ行く汽車はまだかときいた。雑役夫は突然の間にいくらかあわてながら、十一時九分、まだ一時間半ありますと答へた。併し私の乗つて行く臨時汽車は神戸の先まで行く。

殊に運轉し始めたばかりの臨時汽車は人が知らないので殆んど數へる程の人數しか乗らない。恐らく皆が一晩（ゆつくりではなくとも）とに角寝通して行けるだらう。特に子供は助かる。それに反して普通の直行は臨時汽車の運轉を必要とする位だからひどくコムに相違ない——で私は臨時汽車のある事を教へたくて堪らなかつたのだ。

私は母親の前に立つた。さうして汽車のことを説明した。母親は知らない人から突然口をきかれて、殆んど敵意に近い驚愕の色を浮べた。私が「もう直ぐ來ます」と云つた時には、慌て、立ち上つて、私に禮を云ふどころでなく寧ろ當惑したやうな顔附で、早口に老人や子供をせき立てた。もう彼女の心には私の方などに眼を呉れる餘裕がないらしく見えた。私は間が悪くなつてそんなに慌てなくともまだ時間はゆつくりありますと注意することが出来なくなつた。で仕方なく、側にある事を恐れる人のやうに、急いでそうつと待合室を出てしまつた。

汽車が來た。乗客は果して少なかつた。あの子供たちは樂をするだらうと思つて、私はひとりではゝゑんだ。

九 夏目先生の追憶

—

夏目先生の大きい死にあつてから今日は八日目である。私の心は先生の追懷に充ちてゐる。併し私の亂れた頭はたゞ一つの絲をも確かに手繰り出すことが出来ない。私は夜更くるまで此處に茫然と火鉢の火を見まもつてゐた。

昨日私は先生に就て筆を執る事を約した。その時の氣持では、先生を思ひ出す毎に涙ぐんでゐる此頃の自分にとつて、先生の人格や藝術を論ずるのがせめてもの心やりである様に思へたのであつた。併し今日になつて見ると私は自分の心があまりに落ちついてゐないのに驚く。何を論ずるのだ。今此處で追懷の涙なしに先生の人格を思ふことが出来るのか。殊に先生の藝術に就ては、今新しく讀みかへしてゐる

暇がない。數多い製作の或者は臃ろな記憶の霞のかなたに殆んど影を失ひかゝつてゐる。或者はたゞ少年時の感激によつてのみ記憶され、或者は幾年かの時日によつて印象を鈍らされてゐる。それでなほ先生の藝術を云爲することが出来るのか。――私は敢て筆を執らうとする自分の無謀にも驚かざるを得ない。しかも今私は二三の事を書きたい衝動に驅られ初めた。私は斷片的になる危険を冒して一氣に書き續けようと思ふ。(もう直ぐに先生の死後九日目が始まる。田舎の事とてあたりは地の底に沈んで行くやうに静かである。あ、遙かに法鼓の音が聞えて来る。あの海邊の大きな寺でも信心深い人々がこの夜を徹しようとしてゐるのだ。)

先生の追懷に胸を充たされながらなほ靜かに考をまとめる事の出来ないのは、ただ先生の死を悲しむためばかりでない。餘計な事ではあるがこゝにもう一つの理由を付け加へる事を許して頂きたい。私は心からの涙に浸された先生の死のあとにそれとは相反な慘ましい死を迎へる筈であつた。しかし先生の死の光景は私を興奮させた。

私は過激な言葉を以て反對者を責め家族の苦しみを冒して、たうとう今日の正午に瀕死の病人を包みくるんだ幾重かの嘘を切つて落す事に成功した。肉體の苦しみよりも寧ろ虚偽と不誠實との刺戟に苦しみ腕いてゐた病人が、その瞬間に宿命を覺悟し、心の平靜と清朗とを取り返すのを見た時、私の心はいかに異様な感情に慄へたらう。……私は感謝し喜び、さうして初めてまじり氣のない感情でしみんと病人を悲しみ傷んだ。生と死の嚴肅さが今日から病室を支配し初めた。夜が明ければ私は何を措いても死んで行く者を慰めるために出掛けなければならぬ。――私は落ちついて先生を論ずるよりも、反つてこの方が先生に對する感謝を現はすに適してゐる事を感じる。

――私は頭が亂れてゐる。書出しからしてもう主題にふさはしくない。

二

偶然であるか必然であるかは私は知らない、とに角私は先生の死に就て奇妙な現

象を見た。この秋私は幾度が先生を訪ねようとして果さず、殆んど三月振りで十一月二十三日に先生を訪ねた。その日はいい、天気だったので、Aと共に戸山ヶ原を散歩して早稲田まで行つた。Aは仕事がいそがしいため先生の所へは寄らない筈であつた。私は一緒に行きたいと云つていろ／＼押問答しながら歩いた。突然Aは一緒に行かうと云ひ出した。それから十分程で先生の所に着いた。すると丁度十分程前に先生が最初に血を吐かれた所であつた。

私たちは何かの手傳ひでも出来れば結構と思つて上る事にした。座敷に通つてからふと床の間を見ると、床柱にかゝつた鼻まがりの天狗の面が掛物の上に横面黒像を映してゐる。珍らしい面だと思つて床柱を見たが、そこにはそんなに大きな面は掛つてゐない。では小さい面が光の具合で大きく映つたのかしらと床柱の側まで行つて見ると、そこに掛つてゐるのはたゞ羽團扇と圓い團扇だけであつた。併し影は恰好から、釣合から、どうしても本當の面としか見えなかつた。あまりうまく出来

てゐるのでその面が奇妙に氣に掛り、あとで悪かつたと感じたほど執拗にその面を問題にした。——この出来事がひどく氣になつてゐたゞけに、臨終の日「死面」といふ言葉を聞いた時、私は異様な感じに胸を打たれた。本當に悪い辻占であつた。鼻の曲つてゐたことも。

私が先生に初めて紹介された日にも奇妙な事があつた。十八の正月に「倫敦塔」を讀んで以來書きたかつた手紙を、私は二十五の秋にやつと先生に宛て、書いて、それを郵便箱に投げ入れてから芝居に行つた。私の胸にはまだその手紙を書いた時の興奮が残つてゐた。その時に廊下で先生に紹介された。それまで曾て芝居や音樂會で先生を見かけた事のなかつた私が、その日特に芝居で先生と落合はなければならなかつたのは私にひどく不思議に思へた。少なくとも私だけにはその日がたゞの日ではないやうに見えた。

三

先生を高等學校の廊下で毎日のやうに見た頃は、たゞ峻嚴な近寄り難い感じがした。友人たちと夕方の散歩によく先生の千駄木の家に行つたが、中へはいつて行く勇氣はどうしても出なかつた。併し先生に紹介された時の印象はまるで反對であつた。先生は優しく人を吸ひつける様であつた。さうしてこの印象は最後まで續いた。私は如何に峻嚴な先生の表情に接する時にも、先生の溫情を感じないではゐられなかつた。

私が先生を近寄り難く感じた心理は今でも無理とは思はない。私は現在同じ心理を、自分の敬愛する××先生に對して經驗してゐる。それは恐らく自分の怯懦から出るのであらう。併しこの怯懦は相手が恰も良心の如く、自分に働きかけて來るから起るのである。その前に出た時自分の弱點と卑しさを恥ぢないでゐられない故に起るのである。私は夏目先生が氣難かしい疝癪持であることを知つてゐた。もとよりそれは單なる「我儘」ではない。總て自己の道義的氣質に牴觸するものに對す

る本能的な氣短かい怒りである。従つて、自己の確かでない感傷的な青年であつた私は、自分が道義的にフラ／＼してゐる故を以て無意識に先生を恐れた。さうして先生の方へ積極的に進んで行く代りに、先生の冷さを感じてゐた。かう云ふ感じを抱いた者は恐らく私一人ではなかつたらうと思ふ。

この事實を先生の方から見ればどうなるか。私はそれを明かにするために先生の手紙の一節を引く。――

「……私は進んで人になついたり又人をなつてたりする性の人間ではないやうです。若い時はそんな舉動も敢てしたかも知れませんが、今は殆んどありません。好きな人があつてもこちらから求めて出るやうな事は全くありません。……然し今の私だつて冷淡な人間ではありません。……」

「私が高等學校にゐた時分は世間全體が癩に障つてたまりませんでした。その爲めにかつたを滅茶苦茶に破壊してしまひました。だから好かれて貰ひたく思ひ

ませんでした。私は高等學校で教へてゐる間たゞの一時間も學生から敬愛を受けて然るべき教師の態度を有つてゐたといふ自覺はありませんでした。……けれども冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間ならあゝ疝癢は起しません。

「私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ、道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものはありません。」

それは先生の前に怯懦を去つた時直ちに解つたことであつた。先生は寧ろ情熱と感情の過冗に苦しむ人である。相手の心の動きを感じ過ぎるために苦しむ人である。愛に於て絶對の融合を欲しながら、それを不可能にする種々な心の影に對してあまりに眼の届き過ぎる人である。そのため先生の平生にはなるべく感動を超越しようとする努力があつた。先生は相手の心の純不純をかなり鋭く直覺する。さうして相手の心を細かい隅々に互つて感得する。先生の心臓は活潑にそれに反應するが、併し先生はそれだけを露骨に發表することを好まなかつた。先生は親切を蔭でする、

さうして顔を合はせた時にその親切に就て言及せられることを欲しない。先生にとつては、最も重大なことはたゞ黙々の内に、瞳と瞳との一瞬の交叉の内に通せらるべきであつた。従つて先生は對話の場合かなり無遠慮に露骨に突込んで來るに拘はらず、問題が自分なり相手なりの深味に觸れて來ると、直ぐに言葉を轉じて了ふ。さうして手觸りのいゝ諧謔を以て柔かくその問題を包む。(勿論心の問題でもそれが個人的關係に即してではなく一つの人生觀思想問題としてならば、先生は底までも突込んで行くことを辭せなかつた。)これらの所に先生の温情と厭世觀との結合した現はれがあつたやうである。

右のやうな先生の傾向のために、諧謔は先生の感情表現の方法として缺くべからざるものであつた。先生の諧謔には常に意味深いものが隠されてゐる。熱情、愛、痛苦、憤怒など先生の露骨に現はすことを好まないものが。さうして人々は談笑の間に黙々としてこの中心の重大な意味を受取るのである。先生がその愛する者に對

する愛の發表は主にこれであつた。(私の考ではこれが「諧謔」の眞の意味である。従つて眞に貴い諧謔は「痛苦」から、「惱み過ぎる人」から、「厭世的な心持」から、人生に「快活」をもたらさうとする愛の徵證として産れるのである。さうでないものは單に浮薄なる心の徵候に過ぎぬ。)

四

——先生は「人間」を愛した。併し不正なるもの不純なるものに對しては毫も假借する所がなかつた。その意味で先生の愛には「私」がなかつた。私はこゝに先生の人格の重心があるのではないかと思ふ。

正義に對する情熱、愛より「私」を去らうとする努力、——これを他にして先生の人格は考へられない。愛のうち自然的に最も強く存在する自愛に對しても、先生は「私」を許さなかつた。そのために自己に對する不斷の注意と警戒とを怠らなかつた先生は、人間性の重大な暗黒面——利己主義——の鋭利な心理觀察者として我

我の前に現はれた。

先生にとつては「正しくあること」は「愛すること」よりも重いのである。私は曾て先生に向つて、愛する者の惡を心から憐れみ愛を以てその惡を救ひ得る程愛を強くしたい、愛する者には欺かれてもいゝといふ程の大きい氣持になりたいと云つた事があつた。その時先生は、さういふ愛は最負だ、私はどんな場合でも不正は罰しなくてはゐられないと云はれた。即ち先生の考では、いかなる愛を以てしても不正を許すことは「私」なのである。たとへ自分の愛子であらうとも、不正を行つた點に就ては、最も憎んでゐる人間と何の擇ぶ所もない。自分の最も愛するものであるが故に不正を許すのは、畢竟イゴイズムである。

先生は自分の子供に對しても偏愛を非常に恐れた。親の愛は平等であるべきだ。もしそれを二三にする位なら寧ろ平等に愛しない方がいゝ。この事は不斷に嚴密な自己省察を必要とするのであるが、先生はこの點に就て非常に注意を拂つてゐた。

さうしてこの心掛がやがて人生全體に對して公平無私であらうとする先生の努力となつて現はれた。

五

先生が偏窟な奇行家として世間から認められてゐるのは、右のやうな努力の結果である。最負眼なしに正直に云つて、先生ほど常識に富んだ人間通は滅多にない。また先生ほど人間のなすべき當然の行を尋常に行つてゐた人も稀である。たゞ先生はその正義の情熱のために、信ずる所をまげる事が出来なかつた。徳義的脊骨があまりにも固かつた。それが卑屈と妥協と中途半端とに慣れた世間の眼に珍らしく見えたままでである。

併し常識的といふ事が道義的鈍感を意味するならば、先生は常識的ではなかつた。先生はいかなる場合にも第一義のものを誤魔化して通る事が出来なかつた。たとへ世間が普通の事と認めてゐようとも、とにかく虚偽や虚禮である以上は、先生はひどくそれを嫌つた。先生の重んずるのはたゞ道德的心情である。形式習慣に無暗と反抗するのではなく、たゞ道德的心情より出でてのみ動かうとしたのである。これを奇行と呼び偏窟と嘲けるのは、世間の道義的水準の低さを思はせるばかりで、世間の名譽にはならない。

先生の博士問題の如きも、これを「奇を衒ふ」として非難するのは、あまりに自己の卑しい心事を以て他を忖度し過ぎると思ふ。先生は博士制度が世間的にも又學界の爲めにも非常に多くの弊害を伴ふ事實に對して怒を感じた。その内にひそむ虚偽、不公平、私情などに對して正義の情熱の燃え上るのを禁じ得なかつた。これは先生として當然な事である。「博士」は多くの場合に對世間的な根の浅い名聲の案山子である。博士であるか否かに拘はらず學者の價値はその仕事の價値によつてのみ定まる。しかも世間は「博士」が大きい仕事の標徴であるかの如くに考へてゐる。そこに不正と虚偽がある。この點に就ては恐らく眞に眞理の爲めに努力する學者た

ちは先生の態度を是認しないであらう。

六

徳義的脊骨のあるものには四周から煩さい事苦しい事が集まつて来る。先生はそのために絶えず疔癢を起さなければならなかつた。しかも先生はその敏感と情熱のために、更に内からその苦しみを強くしなければならなかつた。先生の禪情はこの痛苦の對策として現はれた傾向である。

先生の超脱の要求は、(非人情への努力は) 痛苦の過多に苦しむ者のみが解し得る心持である。我々は非人情を呼ぶ聲の裏に溢れ過ぎる人情のある事を忘れてはならない。娘がめつちかちになつて自分の前に出て來ても、ウンさうかと云つて平氣であられるやうになりたい、といふ言葉の奥には、熱し過ぎた親の愛が渦巻いてゐるのである。

超脱の要求は現實よりの逃避ではなくて現實の征服を目ざしてゐる。現實の外に

夢を築かうとするのではなくて現實の底に徹する力強いたじろがない態度を獲得しようとするのである。先生の人格が昇つて行く道はこゝにあつた。公正の情熱によつて「私」を去らうとする努力の傍には、超脱の要求によつて「天」に即かうとする熱望があるのであつた。

七

先生の諧謔はこの超脱の要求と結びつけて考へねばならぬ。もと／＼先生の氣質には諧謔的な傾向が(江戸ッ兒らしく)存在してゐたかも知れない。しかし先生は諧謔を以て總てを片付けようとする人ではなかつた。諧謔の裏には絶えず厭世的な暗い中心の嚴肅がひそんでゐた。先生が單に好謔家として世間に通用してゐるのは、たま／＼世間の不理解を現はすに過ぎないのである。我々は先生の人格が諧謔を通じて柔かく現はれるのを見る時、寧ろ一種の貴さを感じないではゐられなかつた。そこには好謔家といふ觀念にあてはまる何物をも認めざる事が出来ない。

先生の藝術はかくの如き人格の表現である。

先生は自己の人格の内から様々な人物や世界を造り出した。この造り出し方に於て私は先生の藝術の一特長を注意したいと思ふ。

先生は眼の作家であるよりも心の作家であつた。畫家であるよりも心理家であつた。見る人であるよりも考へる人であつた。小説家であるよりも寧ろ哲人に近かつた。そのためか、先生の作物に寫實味の乏しいことは、左程氣にならない。(しかしドストイェフスキイが自分を寫實主義者と呼んだ意味でならば、先生もまた寫實主義者である。)

私は先生の藝術に著しいイデエを認める。一の作物の結構は總てそのイデエから出てゐるやうに思ふ。この意味で先生の作物はかなり「作られた」といふ感じの強いものである。しかしその感じはイデエの力強さの下に直ぐ消えて行く。さうして我々は赤裸々な先生の心と向き合つて立つことになる。

我々は先生の作物から單なる人生の報告を聞くのではない。一人の求道者の人間知と内的經路との告白を聞くのである。

九

利己主義と正義、及びこの兩者の争は先生が最も力を入れて取扱つた問題であつた。

「猫」は先生の全創作中最も露骨に情熱を現はしたものである。それだけにまた濃厚な諧謔を以て全體を包まなければならなかつた。この作は恐らく先生の全生涯中最も道徳的疇癢の猛烈であつた時代に書かれたものであらう。念入りに重ねられた諧謔の衣の下からは、世間の利己主義の不正に對する火のやうな憤怒と、徳義的脊骨を持つた人間に對する溢れるやうな同情とがのぞいてゐる。しかしこの時にはなほ問題が先生自身の内生に喰ひ入つてはゐなかつた。その後の諸作は漸次問題が内に深まつて行く經路を示してゐる。さうして最後の「明暗」に至つて憤怒は殆ん

憐愍に近づき、同情は殆んど全人間に平等に行き互らうとしてゐる。顧みてこの十三年の開展を思ふとき、先生も遙かな道を歩いて來たものだと思ふ。

その経路を概観して見ると、「猫」の次に「野分」に於て正義の情熱の露骨な表現があつた。「虞美人草」に至つては鮮やかな類型的描寫によつて、卑屈な利己主義や、征服欲の盛んな我欲や、正義の情熱や、厭世的なあきらめなどの心理を剔抉した。その後の諸作に於ては絶えずこの問題に觸れてはゐるが、それを著しく深めて描いたのは「心」である。この作に於ては利己主義は遂に純然たる自己内生の問題として取扱はれてゐる。私は利己主義の惡と醜さとをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければ止まない正義の重壓の氣味悪い底力も、前者ほど突込んではないが、(特に重大な所にギャップはあるが)、力を入れて描いてある。次の「道草」に於ても利己主義は自己の問題として愛との對決を迫られてゐる。この作で特に目につくのは、主人公の我がいかに頑固に骨に

喰ひ入つてゐるかをその生ひ立ちによつて明かにしたこと、夫や妻やその他の人々の利己主義を平等に憎んでゐること、その利己主義を打ち碎くべき場合方法などを繰り返し繰り返し暗示してゐること、結局それがだん／＼實現されさうになつて行くといふ幾分光明のある結末が先生の作として極めて珍らしいことなどである。この作は明かに次で現はれた「明暗」の前提をなしてゐる。「明暗」に於ては利己主義の描寫が辛辣を極めてゐるに拘はらず、作者は各人物を平等に憐れみ勞はつてゐる。さうして天真な心による利己主義の征服を暗示するのみならず、一步々その征服の實現に近寄つて行つた。(先生はそれを解決しなかつた。しかし或は——自らの全存在を以て解決したのではないのか。)

一〇

戀愛と正義の葛藤、利己主義による戀愛の悲劇なども、先生が熱心に押しつめて行つた問題であつた。こゝに先生の人生に對する厭世的な氣分が現はれてゐる。戀

愛は人生の中核をなすものであるが、しかしそれは正しく生きることと牴觸しはしないか。また戀愛のある所に必ず幸福な心の融合があるといふ事は可能であらうか。人と人との間には掛ける橋がないといふ言葉は眞實ではなからうか。

「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」などが右の題目の開展であることは明かである。「三四郎」に芽ぎして「それから」に極度まで高まつた戀愛の不可抗の力は、遂に正義を押し倒した。作者はこの事を可能ならしめるために享樂主義者を主人公とした。しかし不可抗の力の強さを際立たしめるためには、あらゆる同情を不義の戀に落ちて行く男女の上に注ぐ事をも辭しなかつた。「門」はその解決である。男女の相愛はこれほど深まる事が出来る。しかし押し倒された正義は執拗に愛する者の胸を噛んでゐる。完全に相愛する男女の生活にも惨しい寂しさがある。さうして遂に正義は蛇のやうに謀反者の喉に巻きつく。

「彼岸過迄」に於ては愛を雙方で認めながら心も體も近づく事の出来ない宿命的な悲劇が描かれてゐる。更に「行人」は夫婦の間でどうしても心を觸れ合はせることの出来ない愛の悲劇を描いてゐる。愛は遂に絶望である。

この問題に就ても「道草」は一つの活路を暗示する。碎かれた心のみが愛を生かせ得るのである。「明暗」に至つてそれは正面から取扱はれた。「私」を去れ。裸になれ。そこに愛が生きる。その他に愛の窒息を救ふ道はない。

—

先生の厭世的な気分は戀愛を取扱ふ態度に十分現はれてゐる。しかしそれが更に明かに現はれてゐるのは生死の問題に就てである。こゝに先生自身の超脱への道があつたやうに思ふ。

元來先生は輕々しく解決や徹底や統一を説く者に對して反感を持つてゐた。人生の事はさう容易に片附くものでない。頭では片づくだらうが、事實は片附かない。——しかしこれは片附ける事自身に對する反感ではなくて、人生の矛盾や撞著を

あまりに手軽に考へる事に對する反感である。先生は望ましくない種々の事實のどうにも出来ない根強さを見た。さうしてそのため苦しみ跪いた後、厭世的な「あきらめ」に達した。顧みて口先ばかり景氣のいゝ徹底家の言葉に注意を向けると、思はずその内容の空虚を感じないではゐられないのである。

けれども「あきらめ」に達した故を以て先生は人生の矛盾不調和から眼をそむけたわけではなかつた。先生はます／＼執拗にその矛盾不調和を凝視しなければならなかつた。寂しく悲しく苦しかつたに相違ない。(たとへ種々の點で所謂徹底家よりも「あきらめ」に沈んだ先生の方が遙かに徹底してゐたとは云へ。)

それ故先生は「生」を謳歌しなかつた。生きてゐる事は致方のない事實である。望ましいことでも望むべき事でもない。たゞ併し生きてゐる以上は本能的な生への執著がある、しなければならぬ事、則らなければならぬ法則もある。それは苦しいかも知れない、苦しくても止むを得ない。——抑も生きる事が苦しみ事なので

ある。生きてゐる以上は種々の日常の不快事を(他人の不正や自分自身の不完全や好ましくない運命やを)避ける事が出来ぬ。寧ろそれらの不快事が生きてゐる事の證據である。人生とはもと／＼かくの如きものに他ならなかつた。

併し先生は「死」を「生」より尊しとしながらも、「死」を謳歌しなかつた。死も亦致方のない「事實」として存在する。それは瞑想する自分には望ましい事實であるが、本能的には恐ろしい。強ひて死を求めるのは不自然である。けれども死が人間の運命だといふ事は人間の不幸ではない。従つて死んでもいゝし死ななくてもいい、生きてゐてもいゝし、生きてゐなくてもいゝ。

このやうな生死に對する無頓著が先生のはいつて行かうとした世界であつた。先生はそこに到著するまでの種々の心持を製作の内に現はしてゐる。「門」「彼岸過迄」「行人」「心」などはその著しいものである。こゝにも開展のあとは認められる。「心」に於て極度まで押しつめられた生死の問題は、右の無頓著が著しくなるにつ

れて、一種透徹な趣を帯びながら、靜かに心の底に沈んだ。「硝子戸の中」がその消息を語つてゐる。

一一

併し人生觀の如何に拘はらず、先生の内の「創作家」は先生を驅使して常人以上に「生かせ」働かせた。殊に生死に對する無頓著は反つてこの創作家を強健ならしめたやうに見える。「明暗」を書いてゐた先生は或時「毎日すべつたのころんだのとクダらない事を書いてゐるのは、實際やり切れないね。」と云つた。實際かう感じる事もあつたに相違ないだらう。而も先生は渾身の力を注いで製作しないではゐられなかつた。さうして藝術的勞力その者が先生の心を満足させた。炎熱の烈しかつたこの暑中も、毎日「明暗」を書きつゞけながら、製作の活動それ自身を非常に愉快に感じてゐた。そのため生理的にも今迄になく快適を感じてゐたらしかつた。(その實は製作の興奮のため徐々に身體を疲勞させたのであつたらうけれど。)

先生が製作によつて生の煩はしさを超脱する心持は、私の記憶では、「草枕」や「道草」などに描かれてゐたと思ふ。

一二

私は極めて概括的な、そのくせバラ／＼になつた觀察を書いた。もと／＼先生の藝術に就て適切な評論をなし得ようとは思つてゐなかつたから、これ位で筆を擱きたい。

先生の藝術に就てはなほ論すべき事が多い。私は先生が「何を描かうとしたか」に就て粗雑な手を一寸觸れたのみで、「如何に描いたか」の問題には全然觸れなかつた。そこへはいればとても容易に出られないと思つたからである。それに、私の今の心持はたゞひたすら先生の人格に引きつけられてゐる。先生の技能が提供するさまざまの興味ある問題は、たとへその興味が非常に深からうとも、今直ちに私の心の中心へ來る事が出來ない。併しそのために讀者諸君の注意をこの方向へ向けて

悪いといふわけは少しもない。私は先生の死に際して諸君が先生の全著書を一まとめにして更めて鑑賞されんことを希望する。さうしてこゝに説いたやうな先生の人格と生活との表現がいかなる姿とリズムによつて行はれてゐるかを仔細に檢せられんことを勧告する。先生の藝術はその結構から云へば建築である。總ての細部は全體を統一する力に服屬せしめられてゐる。更にまた先生の全著書は先生の歩いた道の標柱である。總ての作は中心を流れるいのちに從つて並べられてゐる。これらの物に親しむのはいかなる意味に於ても我々を益し我々を幸福にするだらう。

一〇 人間の心理には

—

人間の心理には自分の内に横はる恐ろしい事實を出来るだけ見ないでゐたいといふ傾動がある。これが最も明かに動くのは、希望と勇氣に輝いてゐる自分の眼の前に、突然、見るを欲せぬ暗い事實が宿命的な物凄さを以て現はれ出でた瞬間である。いかに勇氣のある人でもこの咄嗟の瞬間には思はず眼をそむけようとする。心弱いものは眼をそむけたきり元に歸へすことが出来ない。——併したとへ人間の心理一般に通ずる衝動であるにしても、それを處置する態度の相違は、人格の價値を全然異ならしめる程に重大である。そこに人格の強さ貴さの程度がハッキリと現はれる。人は恐らくこの點に於て眞の勇敢と怯懦との意義を見出し得るだらう。

或人々は恐ろしいものから絶対に逃げようとする。彼の欲するのは眞實でなくて虚偽である。たゞ自分の心を安める事さへ出来れば、何を擲んでも構はないつもりになつてゐる。従つて恐ろしい眞實を暗示する總てのものに敵意を持ち、その眞實を覆ひ隠さうとする總てのものに媚びられる——こゝに眞の怯懦がある。生活よりの逃避がある。

また或人々はたとへ一度眼をそらせても直ぐに又その恐ろしい物を見返らないではゐられない。彼は魔物に魅せられたやうに眞實に引きつけられる。さうしてその眞實の故に彼は衰弱する。而も彼は眞實から眼を放すことが出来ない。——こゝには確かに勇氣がある。たゞこの勇氣によつて自分を高めて行く力が足りないのである。

眞に勇氣あり力ある者は、恐ろしい眞實を見つめると共にそれに堪へる道を知つてゐる。さうして更に、恐ろしいものと戦ひそれに打ち克つて自分の生を高めるために、若い獅子のやうに努力する。これこそ我らの望む態度であり、また我らの到達しなければならぬ境地である。

二

我々は眞の勇氣と力とを獲得する爲に努力する。自分の内の怯懦と無力とを残酷な程に卑しめる。併し人が恐ろしい物より眼をそむけて虚偽を求めてゐるのに接した時、我々はいかに振舞はなければならないか。

虚偽を欲する人に向つてその意の儘に虚偽を與へることは、怯懦の醜さを感じない人にも自然に自由に樂々と行はれる。併し怯懦を卑しめる者はいかに相手の苦しみに同情しても自敬の念をいくらか傷けることなしに虚偽を與へる事は出来ない。我々は虚偽を憎む。眞實を相手の胸に注ぎ入りたい衝動を感じる。たゞ相手から幻影をもぎ取つた時の相手の苦しみを思ふ時、思はず自己の人格の命ずる所を差控へたくなるだけである。従つて此際の我々の同情は（同苦は）相手の苦しみを自分の

胸に感ずるばかりでなく相手の苦しめない苦しみ（怯懦を見る不愉快、虚偽を助ける不愉快）をも感じなければならぬ。同情（同苦）が同情される人の苦しみよりも烈しいとはこの様な場合を云ふのである。同情の危険を説く根據はこゝにある。我は右のやうな同情によつてあまりに多く自己を引下げる危険を警戒しなくてはならぬ。

我々は出来るならば虚偽を欲する心を蹂みにじつて眞實を目の前に突きつきたい。それは本當の意味で親切である。併しそのため相手がひどく苦しむのを知つてゐる際に、我々は思ひ切つてそれを敢行し得るか。そこには或程度の冷酷が必要である。我々は敢て冷酷であることが出来るか。——我々はなほ誰にでもそれをなし得るほど力強くない。併し相手から虚偽をもぎ取ると共にその苦しみに打ち克つ勇氣を與へ得る場合には、（それほど我々が愛と力を注ぎ得る相手に對しては、）我々は充分冷酷であることも出来るのである。

三

眞實を見つめるために衰弱する人に對しては、我々は心からの同情を注ぐ。この種の人は虚偽によつて慰めようとすべきでない。併しまた彼ら自身の認めてゐる恐ろしいものを、側から突つく様なことをしてもいけない。我々はたゞ彼らを勞^{いた}はり、しみどくした氣持で力づけるべきである。彼らがその恐ろしいものに打ち克つて、高い力強い生を擱み得るやうに。

我々は恐ろしい眞實に對して勇ましく戦ふ人に接する時、自由な悦ばしい氣分を味ふ。我々はこの種の人と心から共に喜び共に悲しむことが出来る。これこそ眞に蒼空の如く透明な同情である。

一一 懷疑と信仰

私はこゝにたゞ懷疑と信仰との心理を語らうとしてゐる。たとへ幾何か會得する所があつたにしても私はまだ「真理」を悟つたとは云へない。私は道を説く權威を十分に力強く自分の内に感ずるまで、人に説くといふ如き事をつゝしみたいと思つてゐる。私の試みる所は、あくまでも、峻しい道程を辿る者の貧しい體驗の告白である。

私は近頃一つの機縁に逢著した。さうしてまた一つの自分の眼があいたことを經驗した。自分ではそれが非常に嬉しい。しかしその機縁となつた出來事は、要するに、恥づべき自己の混亂迷惑に過ぎないのである。一晝夜の間私は性格を奪はれ理智を奪はれ、自己その者さへも奪はれかゝつてゐた。私の精神は恰も泥酔したものの肉體のやうに意久地がなかつた。けれどもその惑亂は幸にも無駄ではなかつた。再び自分の足で大地を踏みしめた時には、私は曾て經驗しなかつたほど強く自分の性格を、自分の理智を、さうして自己の力を感じたのであつた。さうして今更のやうに自己の内の「生」に對して驚異しないではゐられないのであつた。『これが人間の内の「生」である。萬人を生かしてゐる「生」である。何といふ素晴らしいことだらう。しかも人間はどうしてこのやうにその「生」に對して盲目であり得るのか。彼等は殆んどこの無上の寶を所持することを意識してゐない。さうしてたゞ「あつてもなくてもいゝやうな些細なもの」にその全身の力を集注してゐる……しかしそれは他人ごとではなかつた。自分もまた確かにその一人に相違なかつた。恐ろしいことだ、身慄ひの出るやうに恐ろしいことだ。』かうその時に私は感じた。さうして私の心は熱い感謝に充たされた。

私はその機縁を與へた人が貴い心情の持主でなかつたからと云つて、その人に對する私の感謝を差控へようとは思はない。たとへそれが詐欺師であらうと乞食であらうと私の感謝に變りはない。私はたゞそこに私の内のものを觸發した或大きい手の現はれを感じるばかりである。乾いた藁の積まれた所では一本のマッチもよく大きな焰をつくる事が出来る。たとへその焰が前から藁の内にひそんでゐたにしても、それが現はれ得るためには小さいマッチの火の恩を被らなくてはならないのであつた。しかしながら我々は、内に何事かを積み上げてゐる際に、それを觸發する力が如何なる形に現はれて來るかを豫め推知することはできない。従つて我々は周圍に迫るあらゆる出來事に對して鋭敏な觸角を働かせてゐなくてはならぬ。昔アッシシの市の郊外で禮拜堂の司祭が、その日課である福音書の或個所を讀んでゐた。その時司祭の胸には野心と貪慾と姦淫の心とが渦巻いてゐたかも知れなかつた。しかしその司祭の聲によつて傳へられた福音の言葉が、アッシシの富める商人の息子ノ

ランチェスコに與へた激動は、おほよそ人間の心の根を張り得る最も強い欲望をも打ち碎き得る程のものであつた。かくの如きことがこの平凡な司祭の聲によつて起り得ることを誰が豫期し得たであらう。それはたゞ天與の機縁である。それを逸しなかつたのはフランチェスコの觸角が鋭敏だつたからである。——我々はその物の卑しさの故にその内にひそむ機縁を逸してはならない。機縁となり得る點より云へばいかに卑しい者も感謝に價するのである。——まことに彼には貴い心情がなかつた。併し彼は太古の人間のやうな力強さを持つてゐた。彼の心には現代の青年に共通なあの「迷ひ」が微塵もなかつた。彼は一本の突き徹る烈しい力を以て易々と他人の人格を征服し得た。たゞ「貴い心情」がないといふことを他にしては、(云ひ換へれば彼が釋迦や基督の意味に於ける宗教家でないといふ事を他にしては)、彼もまた一種の「人」である。彼がその力強さを以て釋迦の道破した眞理を語る時には、たとへ彼が眞實にその眞理を會得してゐないにしても、なほ釋迦の言葉に一種の熱

と力とを與へ得るのである。彼は恐らく多くの人を、彼の一風變つた猛烈な樂欲の犠牲として、一層深い迷ひの淵に追ひ入れるだらう。しかもなほ同時に、鋭敏な觸角を有する多くの人々に對しては、無上に貴い暗示と刺戟とを與へ得るだらう。この意味に於て彼は惡魔の使徒であると同時に神の使徒である。

私は手綱を控へ／＼書いてゐる。しかも遂に自分を聖フランチェスコに比するかのやうな不遜に陥つた。私は顧みてたゞ苦笑するばかりである。なるほど私には一つの眼が開いた。私の心は歡喜に溢れてゐる。しかしその開いた眼が時折ふさがつて、無條件に元の盲目に歸る瞬間のあることを、明かに私は知つてゐるのである。いかなる意味に於ても私は自分が新しい境地へ身を以て躍りこんで行つた、とは云ひ得ない。あくまでもたゞ私の眼が、時折ふさがらなければならぬ程度に開いたに過ぎないのである。これをかの全然たる生活の革命に比する時、私は自分の行先のまだ／＼遙かなことを嘆じないではゐられない。ドストイェフスキイの描いた聖

僧ゾシマの回心などに思ひ到ると、寧ろ私は自分の貧血的な辿り方を呪ひたくなる。(しかし新しき誕生への準備は、反撥の形であると吸引の形であるとを問はず、兎に角徐々に成就せらるゝものである。たとへそれがあまりにも徐々過ぎる歩みであつても、歩みである以上何かの意義を持つに相違ない。私はさう思つて自分を慰めてゐる。)

要するに私は、「かうあればいゝのだ、またかうなくてはならないのだ」といふ一つの境地を見たのである。そこへはいつたのではなくて、たゞ垣間見たのである。さうしてたゞそれを見た者として、自分の心持を語らうとするのである。

二

私はまづ我々が「生活」「生命」或は「生」と呼ぶ所の我々に最も直接な問題から出發する。

一體この「生活」といふ言葉ほどいろ／＼な意味に、また曖昧に、使はれてゐる

言葉はない。我々は朝起きて顔を洗つて飯を食ふ、これも生活である。我々は人に逢つて或仕事或取引の交渉をする、これも生活である。我々は或人の病氣を見舞ふ、或は女の側へ行つて酒を飲む、これも生活である。或はまた、我々の食つたものが胃のなかで消化し、呼吸が不斷につゞき、心臓が活潑に動いてゐる、それ故に我々は生きてゐるといふ。——またこれらに對して、我々の思想的活動や、美的感動や、道徳的反省などは一層貴い生活——精神生活——であると云はれてゐる。さうしてそこに生活の意義に關する永久的な争論が生み出される。

しかし要するに「生」は我々の内にあるのである。我々は自ら直接にそれを體驗することが出来る。さうして我々の最も直接に體驗する所は、たゞ不斷に流動して休むことのない活動である。力である。我々はそれ以外の何物をも見出さない。そこにはまだ分裂もなければ問題もない。恐らく「生」本來の姿である所の、無一物にして、しかも萬物を包容する生々たる或物があるのみである。

けれどもこの生々たる或物が「生」その者である事を感じただけでは、まだ何事も起らない。多くの人はかくの如き學説を幾度か聞いたであらう。さうして自らその學説の指し示す通りに感じたであらう。しかもその多くの人には何事も起らなかつた。——何事かゞ起るためには、この或物に對する滿腔の驚異が必要である。この或物に含まれた無限の深さ、恐ろしさ、歡ばしさ、強さ、偉大さ、充實さなどに壓倒せられる事が必要である。何故に、いかにして、かくの如きことが起るかは、説明し得べきでない。たゞ實際に、事實として、かくの如き驚異が突發する。さうしてこの驚異の後にのみ、生々たる或物の無限の意義が人の胸に湧き立つて來るのである。

この時「生」はもはや我々一己の生ではなくして、「生」そのものである。我々はそれを自分のものとして感じるよりも、寧ろ自分に與へられたもの、或は自分に宿つたものとして感じる。この心理から恐らく人格的な神を尊崇する感情が生れたの

であらう。實際我々は生のいみじさを感じることに、一すぢの髪だに白くし黒くすることの出来ない自己の無力を嘆じないではゐられない。さうして「生」の力が自分の内に實現する所のものを總て大いなる手の働らきとして受取らざるを得ない。

三

まことに「生」はその深さを感じる者にとつては無限に深い。しかしそれを感じないものにとつては、極めて平凡な、殆んど注意をひくにも足りない、家常茶飯事である。この感じ方の相違はやがて人生の評価全體の相違に引き起す。前者が熱情と興奮とを以て守る所の生活は後者によつて冷やかに嘲笑せられ、前者が無頓著に捨て去らうとする榮譽や財寶は後者によつて血の値を以て尊重せられる。かくて全然相反する二種の人間生活が我々の間に可能になるのである。

しかし、生本來の姿を悟ると否とに拘はらず、(即ち生本來の面目が暮らし方の上に現はれると否とに拘はらず)總ての人の内にこの不斷の活動である所の「生」

そのものが存在する事は疑ふ餘地がない。——少なくともそれだけの事實を認めて置けば、今試みようとする懷疑と信仰との心理的考察には十分である。

四

さて我々の「生」の活動は、一般に「意識」の説明に於て繰り返へされてゐる様に、必ず統一的のものである。(もとより統一のある所には反對もあるが、しかし反對がなければ統一はない。)この事は我々が日常の意志活動を見れば最も明かに現はれてゐる。何等かの目的に統一されない意志活動といふが如きものは、我々には想像だも出来ないのである。

信仰は我々の「生」に對してこの統一的傾向を高めようとする心の態度である。云ひ換へれば、我々の生の活動を一層活潑に強烈にする所の心の態度である。

懷疑はそれに反して我々の「生」に反對と矛盾とを注ぎ込む。一方では統一に對する刺戟であり、他方では「生」を散亂せしめようとする危険である。

この二つの心の態度が我々の「生」に對していかに重大な意義と影響とを持つかが、今こゝに取扱はうとする主要な問題である。

五

そこで先づ私は、懷疑に就ての二三の觀察から始める。

我々青年の多くは懷疑の功績を熟知してゐる。我々の生を自由にしたものはあらゆる權威に對する懷疑であつた。我々はそれによつて道德の上でも思想の上でも美的翫賞の上でも我々を外から束縛する如く見える總てのものから絶縁した。我々もはや眼をふさがれた奴隷ではない。恰も文藝復興期の新人たちが古い權威に對する謀反人であつたやうに、我々もまた我々の古い權威に對する謀反人である。さうして彼等が新しく綻びた花のやうな新鮮な生活に歡喜した如く、我々もまた我々の未來の多い生活に歡喜する。――

何故に我々は懷疑したか。――それは流動であるべき生の内に流動を妨げる凝固物を見たからである。例へば我々は石のやうに固くなつた忠孝の概念が重い鎖となつて、我々の足に引き摺るのを感じた。しかし我々の祖國を愛する情熱と親を愛する情緒とは、このやうに我々の歩みを妨げなければならぬほど不自然なものではなかつた。そこで我々はかの概念の内に我々を承服せしむべき正當な權威を見出し得ず、遂にそれを我々から投げ捨て、打碎いた。このやうな例は人間の自然を殆んど顧みない、淺薄な形式的な理想主義の教育を受けた我々にとつて、數へ切れないほどにも多かつた。

かくして懷疑は我々の内に凝固せる總ての物を打ち碎かうとする。さうして我々を自分自身の内から湧き出でる自由な生へ導いて行かうとする。これが我々の生の開展にとつて缺くべからざるものである事は云ふ迄もない。我々は絶えず、我々の内に形を結んだものを、この懷疑の檢察の下に置いて見なくてはいけない。我々の所有する概念も思想も評價も、それが我々の生に影響する力を持つてゐる限り、こ

の檢察を逃れるべきでない。かうして絶えざる打破の次に、常に新しいより強い統一が實現されてこそ、我々の生は活潑に成長するのである。懷疑に於て勇敢なものでなければ勇敢に生きることは出来ない、と云つた哲人の言葉にはまことに永遠の眞理があると云はなくてはならぬ。

六

しかしながらまた我々は懷疑の害毒に就て盲目であつてはならない。懷疑が深く喰ひ入り過ぎて、新しい統一を實現する力の失はれた時、我々の生はみじめにも引き裂かれる。そこに我々は生の萎微沈滞、更に悪いことには頽廢への誘惑をさへ感ずるのである。

元來、統一ある生が力強く活動し、散亂した生が弱々しく萎縮すると云ふ事は、個人の生活に於ても團體の生活に於ても、極めて普通の事として認められてゐる。しかしその事實が我々の「生」に、いかに深くまで喰ひ込んでゐるかは、わりに注意

されてゐないと思ふ。行き過ぎた懷疑は人を神経衰弱にし、その生理的活力一般を鈍らせる。多くの病氣はその眞因を懷疑に持つてゐる。それは殆んど我々の想像を絶する程であるらしい。更に懷疑のひき起す思想的混亂、道德的無秩序、仕事に對する情熱の冷却、生の意義に就ての絶望などが、いかに人間の活動を弱め生を低下させるかは頽廢的傾向を有する人々の生活によつて生々しいほどに實證されてゐる。それは人を自殺に導き、狂氣に誘ひ、或は自暴自棄的な惑溺に充ちた生活に引き入れる。そのもたらす所は常に腐敗の臭氣である。

我々はこの事を自分一個の内生に於ても經驗し得ないではない。例へば我々は自己の天分才能などを疑ふ事によつて、或は愛する者の誠實を疑ふ事によつて、身心共に憔悴するのである。また我々は自己の生活力の根強さを疑ふ事によつて、(所謂神經を起すことによつて)屢々自己の活力の緊張をゆるめ、病魔に犯さるゝ隙を造るのである。かくの如き通常の出來事の内にも我々は、生の力がその統一と散

亂との状態に従つて著しく強さを殊にするものである事を、さうして懷疑が十の力をも五や三に減衰するものである事を、明瞭に感知し得ると思ふ。我々の時代の最も甚だしい病弊は種々の形に現はれた「實を結ばぬ懷疑」である。民衆は何處にその生の意義を見出すべきかに惑うてゐる。而も彼等を導くべき權威は既に倒されてたゞ形骸を残すのみである。——彼等は徒らに絶る。藁にさへも絶る。誰が彼等に確乎たる支柱を與へるのか。

七

迷へるものの支柱が「信仰」であることは云ふまでもない。我々は時代の病弊の反映が、雜然たる諸種の信心となつて、我々の目前に混亂してゐるのを見る。

しかし我々の時代の常識は信仰の害惡に就て極めて敏感である。或者は信仰を固定概念として斥ける。或者はそれを現實に對する怯懦として嘲ふ。或者はそれが絶對主義の遺物である故に、また或者はそれが偶像の復活である故に、不斷の改造を

必要とする我々の生活には害があるといふ。——かくして神はデアウインの進化説ほどにも信じられてゐない。

確かに彼等の云ふことは本當である。信仰には正にその通りの害惡がある。そのために文藝復興運動も起らなければならなかつた。しかしそれは主として信仰の内容に關する問題である。生の統一を高めようとする心の態度としての信仰その者には、何等害惡がある筈がない。

例へばこゝに或野心深い宗教家の神秘的な力を信する女があるとする。この女の眼に映するものはたゞ人間以上の力を所有する貴い聖者である。彼女はこの聖者を通じて神秘的な或者を信じてゐる。さうして信仰の前には總てが可能であることを、死者が蘇り山が動くといふことさへも可能であることを信じて疑はない。彼女の胸は幸福に充たされ、彼女の眼は靈の焰の如くに輝く。彼女の生は隼の飛ぶが如く統一され、力は烈風の強さを以て内より湧き出でて來る。かくして彼女の情熱は最も

冷酷な人間をさへも動かし得るほどの異常な熱を帯びて来る。彼女自身の上に或奇蹟が（例へば病が立ちどころに癒されるといふやうなことが）行はれるのみならず、また彼女自らも自分に近い者の上に同じ奇蹟を行ひ得るやうにさへなる。——總ては野心深い宗教家を信する所から出るのである。

この際もしその宗教家が彼女を邪道に導かうとすれば、彼女は易々として導かれて行くであらう。さうして實際この宗教家がそれだけの事をやり兼ねないとすれば、——彼女が信すべきでない者を信じてゐるといふ意味で彼女の信仰は斥けらるべきものである。しかし彼女の生を強烈にした信仰そのものは、（彼女の心からその宗教家を捨象して後に残る心の態度だけは）害悪がないばかりでなく極めて貴いものである。我々が全力をつくして獲得しなければならぬものである。

かくの如く信仰の内容を捨象してたゞ信仰のみを論ずるのは、一見甚だしく抽象的に感ぜられるかも知れない。しかしこれは決して抽象的ではない。信仰の内容は幾度か變つたが、信じかたは曾て變らなかつた。信仰の貴さ卑しさ、偉大さ矮小さを定めるものは信仰の内容であるが、人に力を與へるものはこの信じかたである。我々が屢々聞く言葉に、「たゞ信せよ、神は信する者の胸に自らを現はすだらう」といふのがある。逆説めいたこの言葉は確かに信仰に就ての眞實を云ひ現はしてゐる。信仰はたゞ懷疑に對立する心の態度である。さうして生の力強い開展のために必ずなくてはならないものである。

八

しかしながら、内容を捨象した信仰を考へることは出来ても、事實にそれを現はすことは全然可能でない。人は或者を信することによつて初めて信仰を得るのである。彼女の信じかたは眞實であるが、しかしそれはかの宗教家を信するといふ機縁なくしては決して起り得なかつた。この意味で、信仰は必ず懷疑を寄せつけない一つの内容の獲得を伴ふものである。實際、全然内容のない信仰はあり得ず、また内

容が打碎かれると共に動搖しない信仰も存在する筈がない。

そこで問題は、生の凝滞窒息を伴はないやうな信仰内容が、いかにして獲らるかといふ點に移つて来る。

そのためにはたゞ一つの機縁が必要である。私はこゝで、自己の内の「生」に對する驚異に就て云つたことを想起する。まことに右の如き信仰への機縁となるものは、この「生」の發見である。自己の内にも生そのものの存在することを、宇宙の生、萬物の生、神の生、の存在することを、直覺によつて感得することである。

我々の意識は境に應じて不斷に雜念を生起する。衣食住のこと、人との關係、仕事の届託、名聞、美色、——たゞこれらのことの上のみ我々の多くは生きてゐる。さうして我々の内にある微妙な、絶大な「生」そのものに對しては全然相關する所がない。これ世上の生活である。迷へる衆生の生活である。しかし一度「生」に對する驚異に打たれたものは、(即ち自性を悟つたものは、或は神の力に打たれたも

のは、)新しく生れて永遠の生への情熱を獲得するのである。彼は第一にその純粹の生を力限り生かさうとする。さうしてその生が宇宙の生そのものである故に、絶對にその生の力を信じ始める。

こゝに著しく眼につくことは、この信仰が生そのものに於て自己の生を、神に於て自己を、信ずるといふことである。こゝではもはや自力は問題ではない。自己の力を信ずる事は神の力を信ずる事であり、神の力を信ずる事は自己の力を信ずる事に他ならない。たゞ併し、その力は我々自身の工夫によつて、(我々が思ひ煩ふことによつて、)寸毫も増減せられるものでない。その意味で我々は絶對に歸依しなければならぬ。しかしまた我々は生が自己の内にあることを、さうしてその生を我々が信ずるのであることを、忘れるわけに行かない。その意味で我々は自己を信ずるのである。

即ち我々はまづ「自分が生きてゐる」事に驚異し、次で、その「生」に於て總て

が可能である事を信ずる——これが我々の欲する信仰である。そこには「生」を束縛する何物もない故、また「生」を凝滞せしむる何物もある筈がない。

九

萬法はことごとく自心にあり、自心のうちより頓に真如の本性を見よ。これを見るものは永遠に生きこれを見ざるものは遲疑と惑亂との溝に沈む。たゞ一刹那の堺が人を天堂と地獄ほどに距たらしめるのである。

しかしながら、我々の「生」本來の姿に驚異したのも、更にまたいかに多くの雑草が我々の心に根をおろしてゐるかに驚くであらう。さうして時には、いづれが我々人間の本來の姿であるかにさへ迷ひ出すこともあるだらう。けれどもかくの如き懷疑は遂に全心を震駭した驚異を覆へすことが出来ない。絶對的な生を感じたものにとつては、相對的な諸々の欲望や觀念は、たゞ生を不自由ならしめる繫縛としてのみ感ぜられる筈である。いかにそれが人間の自然的な欲望に見えてゐよう

とも、それはたゞ一つの境に我々を繫縛するに過ぎない。我々は絶對に眞實に自由であることを欲する。自由こそは我々が努力の究竟の目標である。

自由は我々の「生」の眞實の姿である。それは我儘と放恣の意味ではなくて、眞實の無頓著を意味する。それは總ての欲望を斷離した隱遁の生活にあるのではなくして、總ての欲望に執著することなき無念の境にあるのである。我々にして確乎と自己の「生」を把持する以上、さうしてその「生」の不斷なる創造的活動を縦横に自在ならしめる以上、目前の一物を所持すると否とは、世人の賞讃をうくると否とは、何ら關する所がない。眞實の生の力はあらゆるものの上に働くが、しかしその内の何物にも捕へられない。強ひて或欲望を解決しようとするものはその欲望に捕へられ、欲望の發動をその赴くがまゝに頓著しないものは反つてその欲望から自由になるのである。

かくの如き見地に立つて我々が日常生活を顧みる時、我欲や貪慾や色欲などに